EINFÜHRUNG IN DIE PSYCHOANALYSE

von Kenji Ohtski, 3te Aufl., 1935

精神分析概論

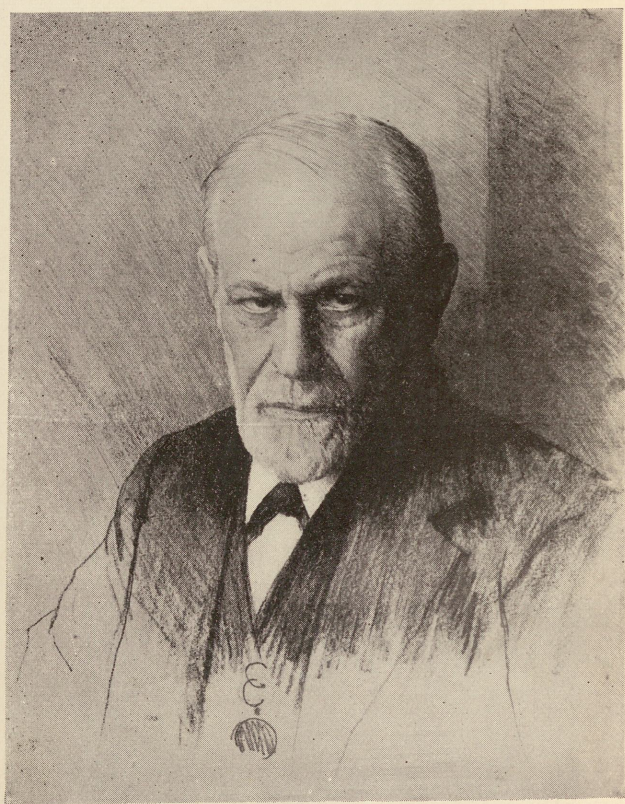
大槻憲二著

東京精神分析學研究所
出版部發行

大槻憲二著

（増訂第三版・昭和十年）

精神分析概論

東京精神分析學研究所出版部

16. 6. 1932

PROF. Dr FREUD

WIEN, IX., BERGGASSE 19

Lieber Herr Ohtski

Ich habe mit grosser Befriedigung Ihre Sendung zwei Bücher Zeitung und kleine Photographie erhalten. Gerne hätte ich Ihre Darstellung der Psychoanalyse selbst kennen lernen wollen aber das ist leider unmöglich.

Was den Gegenstand betrifft, den Sie von unserem Verlag erwartet u. nicht erhalten haben, so habe ich dort anfragen lassen, um was es sich handelte. Wenn möglich, wird die Sendung wiederholt werden.

Mit vielem Dank für Ihre Bemühungen und freundlichen Wünschen Ihr

Freud

第三版自序

本書は昭和七年五月十八日、雄文閣からその初版を公刊した同名書の第三版である。初版上梓後、約一年にして再版を出し、今またこゝに第三版を公にすることになつた。が、この第三版は前二版と比較すると、殆ど別書と思はれるほどに一大改訂と增補とが加へられた。日本人として斯學に入門せんとする人皆のために、あらゆる點に於いて最も手頃な書物を作りたいといふのが私の素志であつたのだ。さうして、その素志はこの第三版に於いて相當の程度まで達せられたと著者は確信してゐる。

本書初版を公にした頃と比べると、世間の斯學に達する態度は餘程違つて來た。私は初版序文に於いて述べたやうな解嘲的な、辯明的な言葉を弄する必要はなくなつた。たゞ若き同胞邦人たちが本書を正しく（「抵抗」なく）讀んで、これを或は斯學奧堂への發足點とせられるか、

或は實生活に應用し、自他を幸福にするの基礎にせられるか、何れかで、否、何れもであらむことを希ふに過ぎない。この學問は前代の陳き教養が先入見となつてゐる固陋な人々には、なかく正しくは受容れられないのだ。我々はたゞ新しいジェナレーションの素直な、新鮮な頭腦に期待をかけるのみだ。凡そ學問としてこれ位面白い、且つ役に立つ學問は少いと云へよう。本書を讀まれる方々にお願ひしておきたいことは、たゞ頭（理智）ばかりを働かせないで同時に心臓（無意識）をも働かせつゝ、精讀再讀せられむことだ。能ふべくんば自分の夢を反省しつゝ讀まれむことだ。意識と無意識との兩方を十分に動員しなければ斯學は絶對に正解せられることはないであらう。

昭和十年六月

著者識

精神分析概論目次

精神分析概論目次終

第一章　精神分析とは何か

（Ｉ）無意識心理の發見

精神分析と云ふと大變むづかしいことのやうに初めての人々は考へ勝ちであるが、心の分析は實は、誰でもやつてゐることなのである。幼少の兒童でもやらないことはない。八、九歳くらゐにもなれば、既に相當確實にやり出すものである。「兄ちやんは父ちやんに叱られて云ひ返せないものだから、何でもないことに僕の頭ぶつんだよ」と弟が母に訴へるとする。これ立派に精神分析である。行動の動機が意識面に於いて發見出來ない時（兄からそれほどひどく打たれるべき理由がないから、その行動の原因はその意識面にないと思はれる時）、それを相手の無意識面（父に仕返ししたい憎惡が直接その方面に向ふことを禁ぜられてあるが故に、別方面に

勃發すると云ふ意味で）に求めてゐるのである。右は極めて單純な實例であるから直ぐに分るが、ヒステリーだの强迫神經症だの複雜なのになると、一寸常識だけでは分析しきれるものでない。何れにもせよ、行動の原因が意識面から說明のつく場合は、意識心理學の研究對象であるが、それがつかぬ時、又はそればかりでは十分でない場合、それは無意識心理學、卽ち精神分析學の對象となる。

すべてこのやうに、科學と云ふものは、常にそれが發生する以前に既にそれは不完全な、非組織的な形に於いて、實際的に行はれてゐるのである。建築學の出來上る以前にも、建築上の知識は組織立たない形に於いて存在してゐたであらう。氣象學の發生以前に、氣象上の知識は斷片的に、地方的に存在してゐたであらう。

で、凡そ科學と云ふものは一定の對象又は領域が發見され（氣付かれ）、その對象を研究すべき方法が確立した時に成立するのである。生物界が發見又は假定せられて生物學は存在し、社會が發見又は想定せられて社會學は成立し、心理現象が發見又は想定せられて心理學は樹立せられるといふわけである。では、精神分析とは如何なる對象又は領域を如何なる方法に依つ

て研究する科學であるか。精神分析は人間の無意識心理を對象とし、この對象を獨特の分析的方法に依つて研究する科學である。分析的方法に就いては後に述べるとして、こゝでまづ無意識心理とは如何なるものであるかと云ふことに就いて話しておかう。

精神分析の始祖フロイド博士が始めて無意識心理なるものゝ存在を主張した時、哲學者や從來の陳い心理學者たちの間から『無意識心理』 „das unbewusst Psychische" などゝ云ふのは、言葉それ自身が矛盾であると云ふ說が起きた。心理とは意識に外ならぬ、意識されざることは心理として成立し得ないと云ふのが、これ等の人々の立場であつた。これに對してフロイドはかう云つてゐる。「併し定義と云ふものは常套的なもので、やがて變るものである。無意識は矛盾であり不可能である、と抗論する人々は、少くとも私にはそれを認めざるを得なくなつた源泉まで溯つてその印象をとりに行つたのでない人々であることを私は屢々經驗したのである。これ等無意識への反抗者等は、催眠術に現れる暗示の効果は決して見たことがないのである。また私が彼等に私の分析の實驗を、催眠術をかけない神經病者に就いて示してやると非常に驚いてゐるのである。」と。

こゝで「催眠術後に現れる暗示の效果」と云ふのは、例へば催眠術者が被術者に、午後三時になつたら菓子屋へ行つて菓子を買つて來いと云附けておいて催眠術を解くと、被術者はその時刻になると金を持つて菓子を買つて來る。何のためにそんなお菓子を買つて來るのかと訊くと、何だか知らないが買つて來なければならないやうな氣がして買つて來たのだと答へると、かう云ふわけである。これで見ると、人間は意識の命じないことでも無意識的に行ふことを何としても認めざるを得ないのである。これは無意識心理存在の催眠術からの證明であるが、これと同じやうな證明は、別に催眠術の力は借りなくとも精神分析でも出來るわけであるのは勿論である。

なほフロイドは論を續けてかう云つてゐる。「彼等は無意識とは實際に知られないものではあるが、論より證據が擧がつてゐる以上はこれを認めざるを得ない底の思想であることが分らないのだ。そして寧ろ人々が丁度考へ及ばなかつたもの、『注意の焦點』に來なかつたもの、凡そさう云つた、意識化し得る何物かとして無意識を解してゐるのだ。彼等はまたそのやうな無意識的思想の存在を自分自身の心理生活に於いて、自分自身の夢の分析に依つて確知しよう

とは嘗てしなかつたのである。さうして私が彼等に就いてさう云ふ分析を試みると、彼等は自分自身に思ひもよらぬ考へのあるのをたゞ驚嘆と困惑とを以て受容するのである。また私の見るところでは、『無意識の假定』に對して本質的に反感の起きるその根本は、誰もが無意識に就いて知らうとの氣のない事にあるのであつて、それは抑々無意識などゝ云ふものゝない方が都合がいゝからである。」と。

これはつまり世の人々が自分自身の無意識を認めることへの『抵抗』Widerstand の現象があると云ふことを論じてゐるのである。無意識心理不承認の原因として前に擧げたものは單なる認識不足で、その性質として消極的であるが、今度のは積極的で、認めざらむとするものである。前の哲學的否認、先入觀念的否認と云ひ得べくんば、今度のは無意識的否認、感情的否認で、それ自身精神分析の研究材料である。

(II) 夢の解釋

無意識心理の存在は催眠術後に現れる效果に依つて證明せられるばかりでなく、精神分析獨特の方法に依つて證明せられことは前節に述べた通りであるが、ではその方法とは何かと云ふことが、當然次に問題となつて來る。

それは日常生活の人間のあらゆる行爲の內、意識現象としては說明され難いもの——云ひ損ひ、讀み損ひ、忘却、偶然行爲、象徵行爲など——の研究に依つても爲し遂げられるが、それ等は覺醒時の行爲で、そこには意識の混入または統制が相當の程度まで行亘つてゐるので、純粹な無意識心理現象とは云ひにくい。最も純粹に我々の無意識が現れるのは夢である。で、夢を研究し解釋することが、無意識心理の存在の證明には最も適切であり、重要である。フロイドは「夢は無意識への本道である」と云つてゐる。夢の分析解釋は、本來無意識心理の存在の證明のためではなく、心理的、神經的の病症の治療の必要上案出されたことであつて、精神分析では夢を如何なる原理に照して觀察せんとするのであるか、それを大體說明しておくことが無意識心理そのものゝ研究上にも、精神分析の根本要件を明かにする上にも、大切なことであるから、まづそれをこゝに試みよう。

我々が夢を知るのは、大抵は覺醒後に斷片的に現はれて來る記憶からである。その時、夢は大抵視覺的の（併しまた他種の）感覺印象の混入したもので、この感覺印象のために我々の本當の體驗（夢）は亂されてしまふのである。さうしてそれ等印象の內には思想過程（夢に於ける「知」）や感情表出も混入してゐるのである。かくて我々が夢として想起するものは分析者はこれを「夢の顯在內容」と呼ぶのである。顯在內容は全然矛盾し混亂してをることが屢々だが、時にはその內の何れか一つが矛盾し混亂してゐる場合もある。併し多くの恐怖の夢に於ける如く顯在內容が全然辻褄が合つてゐる場合には、それは我々の心持にはとんと見當のつかないものと思はれるのである。どうしてそんな夢を見るやうになつたか、わけが分らないのである。夢のかう云ふ特質への說明はこれまでは夢それ自身の內に求められ、かゝる特質は神經的要素の一つ無秩序な、無聯絡な所謂「寢呆けた」活動の徵象と見なされて來たのである。

そのやうな說明とは違つて、これほど不思議な顯在內容も、或る眞正の心的構成（それには「潛在內容」と云ふ名がふさはしい）を破壞し變更し書改めたものとして說明したら必ず常にわけの分るものであることを、フロイドは示した。夢の顯在內容は一見その尤らしい意味を持

つてゐるやうに思はれるけれども、それに囚はれず、それを無視してその成分に分解する。それ〴〵に就いて自由聯想をとる。それに關する知識が得られ、さうすればまた分解された各々の要素から出發してゐる聯想の經路を辿ることが出來る。これ等の經路が互に縺れ合ひ、助け合つて、遂には我々の思想が纏まつて來る。さうして、これ等の思想は我々の精神過程に就いて既に我々の承知してゐる事どもと思ひ合せて、成程と首肯出來るやうになる。このやうな「分析」の途上に於いて、夢の内容は段々とその一切の、我々には未知な不思議なことゞもを呈露する。併し分析を首尾よくやるには、仲介となる個々の聯想の想起に對して分析中に擡頭して來る批難的抗議を斷然拒否しなければならない。こんな事を分析者に云つては笑はれやしないだらうか。こんなことは別に只今の場合必要でなからうなどゝ云ふやうな分別らしいことは全然考へずに何でもアケスケに出鱈目に、頭に浮ぶまゝを片端からぶちまける。

想起された夢の顯在内容を、かくして發見された夢の潛在内容と比較することからして「夢の仕事」と云ふ概念は生じて來るのである。夢の仕事としては、夢の潛在内容を顯在内容に轉ずる改變的過程の總體を呼ぶのである。つまり夢が我々に不思議に思はれたのは、今や夢の仕

事のせいでもあると分つて來るのである。

夢の仕事の仕振りは、併し、次のやうに記述することが出來る。――大抵は非常に錯雜した種々な思想が晝間の內に一つに結合してゐて、それの解決がまだついてゐない（晝間の殘物）、その殘物が夜（眠）に入つても自分に必要なだけの心的エネルギー（興味）を確保して睡眠を攪亂せんとする。この晝間の殘物は夢の仕事に依つて一つの夢に變へられ、睡眠にとつて障害のないものとなる。（心的エネルギーが晝間の殘物に纒綿し過ぎてゐると眠れなくなる。）夢の仕事に手懸りを供するためには、晝間の殘物は願望を構成する力がなくてはならない、こんな條件は別に難かしい事ではない。夢の思想から生じ來る願望は前階をなし、後に夢の核心をなすのだ。分析で得た經驗からすると――夢の理論からではない――子供に於いては晝間から殘つてゐる勝手な願望があれば、それで夢を見るやうになることが分る。子供の夢は脈絡があり意味があつて、併し大抵は簡單に終り、容易に「願望充足」„Wunscherfüllung"として認められる。大人に於いては、夢を見させる願望への一般にあてはまる條件は、その願望が意識的思想には未知な（卽ち抑壓された）ものであるか、或は意識の與り知らざる助力を仰いでゐる

かと云ふことであるらしい。右に述べたやうな意味に於いて、無意識を假定せずしては夢の理論はこれ以上發展しないし、また夢の分析の經驗材料が解釋出來ないと分析者は知つたのである。この無意識の願望が夢の思考の（意識面からは正確な）材料に働きかけて夢が生ずるのだ。その時、その材料も、云はゞ無意識界に引張り下されるのだ。詳しく云へば、無意識の思想過程特有の取扱ひを受けるのだ。我々が無意識的思想の特質や、無意識的思想と意識化し得る「前意識的」思想（九五頁參照）との間の區別やを知るのは、今までのところではたゞ「夢の仕事」の結果からばかりである。

こんなわけで夢の仕事は、願望形（オプタチフ）で現れてゐる思想材料に全く獨特の改作を加へる。まづ書き表はし方を願望形から現在形へと變へる。「さうあつてくれないかなア」を「さうなつてゐる」に變へる。この「さうなつてゐる」はどうせ錯覺的表現となるべきものであつて、分析者はこれを夢の仕事の「退行」,,Regression“と呼んだのである。思想（觀念）から知覺影像へと轉回するのである。或はもし（まだ不明なる――解剖的に解してはならない――）精神的裝置の個所（九七頁參照）に就いて云はうならば、思想構成の方面から感覺的認識の方面への轉

回である。(一三頁、戯曲化、影像化に就いての條參照。) この轉回は精神が錯雜に發展し行く方向とは反對で、この方向では夢の思想は視覺的なものとなつて來る。そこで、遂に顯在的な「夢の影像」,,Traumbild"の核心として、造形的なものが生じて來る。このやうな感覺的な具象的なものとして表現せられるやうになる。ために夢の思想はその表現を深く徹底的に變形させられなければならないのである。併し思想が感覺影像に逆變する間に、なほそれ以上の變化が迫つて來る。その變化の或る部分は必要なものとして理解されるが、他の部分は意外なものである。退行に必然的な副的現象として、我々はかう云ふことを知つてゐる。色々な思想を整へる各思想間の關係は、顯在的な夢に對しては失はれてゐる。夢の仕事は、云はゞ觀念を素材として引受けてこれを表現せんとするのみであつて、諸觀念を相互に拘束する思想關係は引受けないのだ。つまり、少くともこの關係なるものを無視することの自由は保有してゐるのだ。これに反し、夢の仕事には、退行(即ち象徴となつて逆變すること)から引出すことが出來ない今一つの部分がある。

夢の思想の材料は夢の仕事の間に一つの全く異常なる合壓を、即ち凝縮,,Verdichtung"を

受けるのである。何故凝縮と云ふ事が起るかと云ふに、それは夢の諸思想の間に於いて偶然的に、或は內容に應じて、發見せられる共通性のためである。かう云ふ共通性は多大の凝縮をなさしめるには槪して不足がちであるからして、夢の仕事に於いては新たな、作爲的な一時的な共通性が作り出される。さうしてかう云ふ目的のためにはとかく好んで言葉が利用される。言葉の音に於いてさまぐ\の意義が符合するのである。（文學に於いても同じで、例へば、「松」と「待つ」とが掛言葉として凝縮せられる如きである。）新に作り出された凝縮のための共通性は夢の思想の代表のやうに夢の顯在內容に入込む。さうして夢の一つの要素は夢の諸思想の結び目及び交叉點に相當し、夢の思想の見地からすれば、全然一般的に、「重複決定を受けてゐる」"überdeterminiert" と云はなければならない。凝縮と云ふ事實は夢の仕事の內でも、最も容易に認識することの出來る部分である。夢の凝縮作用が如何に盛んに行はれるかを見ようと思ふならば、書き留めた夢の言葉の音と分析に依つて得た夢の思想の書下しとを比較して見ればよく分る。

夢の仕事に依つて夢の思想が蒙る第二の大きな變化（フロイドが「夢の轉位」"Traumver-

schiebung" と名付けたあの過程）のある事を成程と知るのは、凝縮の場合ほど容易でない。轉位の現れるのはかうである。顯在的な夢に於いては中心に立ち、また感覺的强度の大きいものは、夢の思想に於いては末梢的であり副的であつたものなのだ。さうして主要なものが小さなものとなつて顯在的な夢に現れる。たとへば（これは夢ではないが、抑壓の働いてゐる點では同じであるから引例するのだが）安宅關に於いて主要なる義經が小さくなり、副的なる辨慶が大きくなつてゐるのと同じである。それは、富樫と云ふ檢閲の眼をすりぬけようとの必要からの轉位である。夢はこの轉位のために夢の思想とは喰ひ違ひを來たし、またこの轉位のために夢が覺醒生活には奇妙なわけの分らないものと思へるのである。そのやうな轉位が起ると、エネルギーの纒綿は重要な觀念から妨げなく離れて重要ならぬものに移動することは有り得る事實でなければならない。それが常態的な、意識化し得る思想に於いてはたゞ、「思ひ違ひ」と云ふ風に見えるのである。

表現せられ得るやうに變化すること（觀念的、抽象的なものを影像化、具體化すること）、凝縮並びに轉位の三大作業は、我々が夢の仕事として認め得るところのものである。もう一つ第四

の作業があるが、これは只今の我々の目的には大して問題でない。「精神的裝置の局所」（九七頁參照）だとか退行だとか云ふ觀念を斷案的に明確にするためには――さうなつてこそかう云ふ研究上の假定も價値を生ずるのだ――退行の何處の驛に於いて夢の思想の種々な變化が起るかを決定せんと試みなければならない。かう云ふ試みは未だ眞劍になつて取上げられてはゐない。併し轉位に就いては少くともかうは確に云へる、思想材料がまだ無意識過程の段階にある間に、轉位は思想材料に生ずるのだと。轉位とは或る人々はどうやら、知覺の領域に達するまで凡そ無意識心理の全過程に亘つて起る現象と考へて來たが、併し一般には凡そ夢の構成に與る一切の力が同時に及ぼす效果であると假定するだけで滿足してゐるのである。かう云ふ問題を論ずるには控目勝にするのが合理的だし、またこゝには論じてないが或る原則上の事も考慮せられるので、私は夢を作る夢の仕事の過程は無意識に在ると主張しておきたいと思ふ。このやうに總じて云へば、夢の構成には三つの段階が區別せられる。――第一に、前意識にある晝間の殘物が睡眠狀態の條件に關係ある無意識に落される。次に無意識に於ける本來の夢の仕事が行はれる。第三にそのやうに仕事をされた夢の材料が知覺にまで退行し、かくて知覺とし

て夢が意識されるやうになること。

夢の構成に與るさまぐ\な勢力としては、睡眠の願望(睡眠を無事に繼續したいと思つて、夢は外界の音響などをも無難なものに變更する。)晝間の殘物が睡眠に依つて無意識に落ちた後もなほそれに殘つてゐるエネルギーの纒綿(だから晝間見聞したことが夢の中へ這入つて來るが、併しこれは多くの場合、たゞ材料に使はれてゐるだけで、その深い意味は別に存するものである。)夢を構成する無意識願望の心的エネルギー、覺醒中には十分に支配してゐるが睡眠中でも全然杜絶してしまつてはゐない「檢閱」Zensur の禁制力、などがある。夢が構成されるかされぬかの問題は、就中この檢閱の禁制を克服することにある。さうしてこの問題は夢の思想の材料に於いて一つの材料から他の材料へ心的エネルギーを轉位させることに依つて解決される。

夢の分析は如何にするかと云ふに、大體の事を云へば、まづその夢を各々の要素に分解するのである。例へば蛇に山で追蒐けられた夢を見たとすると、蛇と山と追蒐けられたと云ふ三つの要素に分けて、その各々に就いて「自由聯想」をとるのである。蛇に就いて何か思ひ當るこ

とはないかな、さう、昨日何處其處の店で蛇の黑燒を見た。その黑燒についてこれ〳〵の事を聯想した、と云ふ風に……。次に山に就いて同樣にして、出鱈目でも（意識には出鱈目と思へても無意識には必然であるから）何でもよいから極めて自由に聯想をとつて行くのである。遂に何の結論にも達しなかつたならば（まづ大抵の場合は結論に達しないものだが）それはそれとしてとつておく。やがてその内にまた別の夢との聯結からして意外の結論に到達してハツと自ら驚くことのあるものである。もし何も直接聯想することがなければ、それは何かの象徵（代理）であると云ふ事が分るのである。例へば蛇は多くは男性器の象徵であるとか、室は胎內のそれであるとか云ふ風に……。併し勿論男性器の象徵が蛇に限らぬやうに、胎內のそれとても室に限つたものではない。夢に於ける象徵の研究はあまり形式的になつてはならない。ところが、大抵人々はまづこの象徵の解剖に興味を持つて分析學に這入るが、これが一通り分ると（勿論正しくはなかなか分らないのだが）何でもかんでも公式的に、單純に片付ける。さうして飽きる。さうして分析學が簡單なやうに思ひ込んでしまふ。

もし何か直接聯想することがなければ、それは象徵であると前に云つたが、この象徵の中に

は人類に、また民族に普遍的なものがあつて、それ等の普遍的象徴に依つて出來上つてゐる夢を分析學上、類型的又は典型的の夢と云ふ。蝶、馬、家、箱、蛇、刀、山、川、海、貝殼などは、人類一般に典型的な象徴であると云ふことが出來る。例へば、こゝに高橋藏相の典型的な夢があるから、それを紹介して見よう。

これは昭和七年六月中、岡本一平が『對面し直す』の題下に、政界諸名家歷訪の記事を漫畫入りで朝日新聞に連載した事があつた。その時、藏相が自ら語つた夢である。

「さう〱、たしか去年のおひなさまの晩だつたよ。夢を見たんだよ。ほら穴に粗末な衣を著た坊さんが修業してゐたのだがね。大きな蛇が出て來て坊さんを呑んでしまつたんだよ。その蛇が池の中に飛込んでね、今度頭を出すとその坊さんを吐き出したのさ。そのとき坊さんの衣は立派な衣になつてゐたんだ。わしは翌朝考へたよ、これはいゝ夢を見たとね。この夢はたぶんわしが慾から離れた證據なのだらうと思つてさ。」

それに對して岡本一平は「私の考へでは巨人型の人は總て分量が多いからそれを退治るとなると普通人よりも骨が折れるだらうと思ひますよ。」と答へてゐる。

こゝに一つの夢があつて、それに對して二つの解釋——藏相の自己分析と一平の漫畫的解釋と——が與へられてゐる。私はそこで、更に分析學からの解釋をこれに加へて、漸次に二人の素人分析家の解釋への批評を試みて見よう。

併し、夢の分析には自由聯想が必要である。聯想かとらざる分析は探海具なくして海底を測るやうなものである。憶測的にならざるを得ないが、併し夢が非常に典型的な象徴で出來上つてゐる場合には大體の判定を下すことが出來ないでもない。さて、この藏相の夢の如きが、その典型的なものゝ一つである。

まづ、おひな樣の晩であつたことが注意される。かう云ふ祭りは非常に人心を幼兒的に退行せしめる機會となるのである。次に洞窟の中に坊さんがゐると云ふのは、明かに胎內空想であ

る。そこへ蛇が來て呑んでしまつたと云ふのは、既に胎内に復歸してゐるものをまだ別の形の胎内に入れたことを意味し、胎内空想の「過度決定」である。蛇に呑まれてその腹を切つてまた出て來ると云ふ傳說は隨分澤山にあることで、明かに再生の象徵である。蛇が「恐ろしき母」の象徵であることは、神話傳說の研究に依つても、知られる。「英雄に西方に於ける水魔に吞まれる。魔物は彼を東方へ連れて行く。……そこで彼は腹中から腹を切り開いて滑り出る」との、フロベニウスの方式と云ふのがあるが、その通りである。この方式に於いて西方の水魔とは西方の海である。西方十萬億土の海は日每に英雄（太陽）を吞み、それを「東方」に連れて行つて再生（日の出）せしめる。吞吐すると云ふ考へ方をする以上は、何か巨大な水魔、水中にゐる怪物、大蛇と云ふ觀念となつて發展して行つたものであらう。この民族傳統的な觀念が、そのまゝ藏相の夢に於いて、蛇が坊さんを吞み込んでから水中へ飛込んだとなつてゐるが、蛇と水とは元々同じものが二つに別れてゐたのである。「今度、頭を出すと、その坊さんを吐き出した。」即ち再生したのである。そこで、前には粗末であつた坊さんの衣裳が今度は立派になつてゐる。再生して英雄になつたことを意味してゐる。英雄は常に生れ更ることに依

つて出來するとは、世界の傳說に普遍的な特徵である。

そこで第一の素人夢判斷者は、これを吉夢と斷じた。「たぶんわしが慾を離れた證據」と解釋したのである。遺憾ながら、この判斷者は素人であるだけに、解釋の根據を提示することが出來ない。たゞさう直觀してゐるだけである。併しこの直觀は正しいか正しくないか。慾を離れたとは、分析術語を以てすれば、「自我が現實觀照の眼を無意識のために曇らされないこと」を意味するのであらうと思ふ。そのやうな透徹した觀照能力は、夢の主人公の僧形に於いて表現せられてゐる。この僧が太陽の如く西海に沒して、東海に再生したときは、優秀な英雄（聖僧）――「立派な衣」と云ふ影像に依つて表現されてゐる――となつてゐる。藏相は珍らしい夢を見たと思つてゐるだらうが、この夢は人々の昔ながらの夢に、民話に、傳說に、繪畫に、いくらでも用ゐてある象徵を採用した典型的な夢である。さうして、藏相のこの自己分析は慥に或る程度まで正しいことを私もまたこゝに保證することが出來る。

ところで、第二の素人分析者の解釋はどうか。彼がまづ夢の本人と夢の主人公とを同一人物と見立てゝ（畫に描いて）ゐるのは正しい。この夢中戲曲の主人公は、普通の舞台戲曲の主人

公がさうであるやうに、作者その人、またはその分身（代償）である。彼は藝術家の直觀力を以て、これを正しく認識した。ところで「巨人型の人（この場合、僧即ち藏相）は、總ての分量（人格、財產、名譽）が多いから、それを退治る（呑むと云ふ形で表れてゐる）となると、普通人よりも骨が折れる（卽ち呑まれないで吐き出した）」と。

この別の解釋を聞いた夢の本人は「なるほどさう云ふものかね」と云つてゐるが、この解釋は納得が行つたのか行かなかつたのか、讀者には判然しない。この第二の素人分析者の判斷はたしかに狡猾である。「貴方は偉い人だから、なかなか退治られませんよ」とのお世辭にも聞えるし、また「さう云ふ夢を見て、自分を英雄聖僧に仕立てゝ喜んでゐるとは、自惚が強いですね」との反語にも聞きなされる。

ところで筆者は第三者として、この二種の解釋への公平な判定を下さねばならない。筆者は第二の分析者よりも更に一層狡猾であると云はれるかも知れないが、これ等兩方の解釋が正しいと思ふ。藏相は確にこの夢に於いて自己淨化を行つた。と同時に、これに依つた獨尊慾（ナルチスムス）を滿足させた。非常に傲慢な感情と、非常に謙虚な感情とが、一つの夢で同時に

滿足させられてゐる。一石二鳥と云ふことは現實では稀有であるが無意識の働き（夢はその一つ）としては極めて普通である。否、常道である。一言で云ひつくせば、これは再生の夢であつて、かゝる空想は夢に於いてばかりでなく、傳說にも童話にも屡々現れるものである。實例は略しておくが、誠に「夢は個人の神話傳說であり、神話傳說は民族の夢である」と云ふ精神分析學の命題は常に正しいのである。

併し夢と云ふものには、何處となく不分明な點の存するものである。如何によく分析してもなほ何處か不可解な點が存する。フロイドも夢には神秘的な點があると云ふことを承認してゐる。また夢は本人が分析を知ることに依つて、本人の解釋力に對して守勢をとるやうである。分析を知つた人の夢は知らない人の夢とは全然違つてゐる。分析の知識が進歩すれば、夢の方は段々奥の方へ逃込んで行く。それを飽くまで追跡して行かなければならない。

併し、夢の分析法は以上のやうに抽象的に述べたゞけではどうしていゝのか、馴れない人々には見當がつかないであらうから、東京精神分析學研究所員奥本島田氏が雜誌『精神分析』昭和八年十二月號に寄稿した『田に水當の夢』と題する實例を、同氏の承諾を得て、左に引用し

ておかう。この夢はよく分析してある。

夢——

あたりは暗い。川尻（地名）の道を下つて來ると、五六人の人が道の兩側に坐つてゐる。それは水當の番人である。暗いので顔は見えない。彼等は道の兩側に居るので私はそのまん中を通りすぎて行つた。平七（家の名）の稻木（稻を刈つて干すもの）の處のシデノ木が生えてゐる處に來ると、うすぐらいのでよくわからんが數人の者が道の兩側にころがつてゐる樣にまるい形がうすぐらい中にわかる。その中を通つて來ると兩側の者はだんだん小さい形の者となる。道のまがり角の處に最後の者がゐるのではつきり見るとねずみの赤子のふくれた形によく似てゐるもので、人の嬰兒位の大きさ。頭と胴とだけがわかる。これまで人だと思つてゐたのにこんな形をしたものがゐる。ばけものかな——こいつ狐につままれてゐるのだな。……と思ふと何だか恐しい。彼は動きもしない。私は氣がふさがつた樣で苦しい聲をフウ・フウと立ててゐた。（昭八、八、八、夜九時頃）

聯想A——私の故郷で少年時代に川尻べは夏の日照の爲めに田がかわくので田へ水當（水を引く）の爲めに友達と共に晩おそくまで其の附近を歩いたものだ。友人の家の名は平七といつてゐた。その田へ水を當てるために私は彼と共に水道を暗いのに見張りに行つてやつた。川尻は細い田舍道で兩側から草が覆茂つてゐる。このあたりはよく狐が火をともすといふことである。私も少年時代にこの道

を夜通るのは恐ろしい様なので、遠路をして歸宅するのだつた。初夏の頃螢狩にもよくこのあたりへ來る。或夕暮、誰かが入道を見たといふことを聞いたことがある。こんな話を聞くと夜はこのあたりは何だか淋しい、恐しい氣分がする。

聯想B——夢を見た日の晝、井戸のポンプで家内に水を汲んでやつてゐた。連日の日照で水はほとんどないので、ポンプは大きな音をがたく立てるが水は少しより出ない。家主（婦人）が見に來たらしい。曰く

「ヒドイ水が出んらしいね——」

（水の出ないことは家主は良く知つてゐるのであるが——）

「ヘエでません」

ヒヨツと彼女の顏を見ると、よく肥えた頰で口を閉いてゐるため（にが笑）にふくれてゐるのが目に付く。「さうく彼女が怒るときはいつもあんないやらしい顏付で聲もあんなもんだ。これはあんまりポンプをがたくやるから怒りに來たんだな。」と思つてゐた。

水を汲みながら家主の顏を見たと同時に、妻の父が寢そべつて本を讀んでゐるのを見た。其の日は掃除で父に手傳に來てもらつてゐるので、もう掃除もすんで休んでゐるのであつた。

聯想C——少年時代に夏、田の草取りをしてゐながら横の溝から田へ水を入れてゐた。その水は少しより流れてゐなかつたし誰も附近に居なかつたので、他の人の田へは水を當ててゐないことと思つ

てゐた。私は一心になつて草取りをしてゐると誰かの聲がする。見ると私が溝から田へ水を入れてゐる處に、某婦人が立つてゐる。實はこの婦人が自分の田へ水當をしてゐるのであつたのだ。私はこの人に叱られるまでそのことを知らなかつた。私はそこで叱られてしまつた。その婦人もよく肥えた人であつた。

其の日の夕方私は水當をしてゐたが、川尻（夢に私が始めてあらはれた處）の處に數人の者が道の側の草の上に坐つて水當番をしてゐる。私もその中の一人であつた。この中で私は他の一人から今日晝水を田に入れてゐたことに就いて訓戒的なことを言はれた。私は何も惡氣で自分の田へ入れたのではない。唯水があまりなかつたので一寸入れただけのことだのに村の中でも相當評判の惡い人物と同一視的にこの人は私を評したのであつた。だから私は極力辯解したかつた。だが、私はどうしても思つてゐる通り言ひ述べることは出來なかつた。晝間彼の婦人に叱られた時も同じく言ひわけする力はなかつた（あまりにもがみ〳〵と壓迫されて）。その後私は時々思ひ出して癪にさわつて言ひわけをしてやらうと思ふこともあつた。私はこゝで訓戒を受けた時に、「あのババが大げさに惡評したんだ」と思つた。

註釋　一――

此の夢は家主たる婦人を惡魔（バケモノ）にしてしまつてゐる。又父をもさうしてゐるところに一種の願望充足がある。然かも私はさうしておいて、それを恐怖してゐるのである。家主を惡魔にしてゐる

ことは次の様に解釋され得る。

（1）私は四十歳以上の年齢の婦人で怒る性質の强い者をよく「惡魔」とか或は「鬼ババ」とか言ふ。
この家主もその中に入る。

（2）水當番人の水に對する關係は、この家主の井水に對する關係に等しい。（私には）

（3）水當番人がしまひにはつきりばけものに見えた。おばけであつたのだ。

（4）ポンプで水を汲んでゐる時に出て來た家主の顔（類）を見た時は怒り顔（惡魔）に見えた。

（5）（3）も（4）も其の形を見た時にさう思はれたのである。私はそれによつて恐怖の雰圍氣に包まれてしまつた。

（1）から（5）までの理由と夢とによつて次の様に結論される。

水當番人＝家主

水當番人＝おばけ

∴　家主＝おばけ（鬼ババ）

又は――

家主＝顔を見た時鬼ババ

水當番人＝形を見た時にバケモノ

家主が鬼ババたることも、水當番人がバケモノたることも、其の結果は恐怖の雰圍氣につつまれる其の心理的價値に於いては等しい。故に、
家主＝水當番人＝ばけもの
私はここまで分析してから、また次の様なことを聯想した。
聯想D――私は以前にこの家主から彼女の息子のことで小言をいはれた事があつたが、その時の顔付を思ひ出す。
聯想E――五六年前に或る地方に居た時、瘦がれた工夫にひどく怒られた事があつた。彼の顔は瓢簞の如く頰骨が出てゐた。口を開いて怒つた處はこの婦人（家主）を聯想させる。
聯想F――幼時母の弟が中折帽を見せると私は恐れるから見せぬ様にと言つたが、彼は笑ひながら頭の部を一寸見せて上り段の處へ置いてしまつたから帽子は見えなくなつた。私は其の時恐しい氣分はなかつた様に思つてゐる。中折の兩方がプクツとふくれてゐるのが思ひ出され、其の色はカバ色であつたと記憶してゐる。
註釋　二――
（a）田へ水を當てる人々は、御互に他人を拒むのである。それは他人が少ない程自分の田へ多く水を與へ得るからである。それと同時に少しでも多く我が田へ水を引く様に他人の目をぬすんで努力する。我田引水の爲めには他人はじやまものである。

（b） 家主の見てゐる前で水の少ないのにポンプをがた〳〵やつてゐることを私はから考へる。「私は少しはポンプがいたむからいけないと思つてゐたので、水がないのでさうがた〳〵やるとポンプがこわれるから困ると家主が思つてゐるのだらう。」と。而かし私はがた〳〵やつて出る水を妻のために汲んでやつた。（もう少しひどくやれば水は多く出るのだが）私は家主の前で悪をなしてゐる樣な心持ちがすると同時に、家主は私にはじやま者であつたのだ。

妻＝田

他の水當番人＝家主＝父

水＝精液＝愛

異性を愛する爲めにはそれを障害する者は悪い邪魔者とされる。

（a）＝（b） エディポス・コンプレクス、

註釋 三――

夢にみたねずみの赤子の形は、正しく龜頭の完全に露出した男性器である。龜頭が完全に露出してゐるのは老年である。私はこの老年の男を恐怖してゐる。

掃除をしてゐる中は何とも思つてゐなかつたが、もう掃除もすんでしまふと、私の義父に對する心はエディポス的である。それは私が妻を愛する爲には父は邪魔者であるし、又恐ろしい。掃除を手傳に來て異れた父が働いて異れて掃除も片附いたので休んでゐる、その父を鬼（鬼ババとしての家主と同一化）

にして、恐怖し憎んでゐる。

（最後のこの分析は四日目に思ひ付いた。聯想Bの後に記してある父の事から分析した。聯想Bの後の部も四日目に思ひ出してBに付け加へたものである。）

（III）無意識と精神症、神經症

さきに云ひ落したが、精神分析の所謂無意識は從來の心理學で云ふ潜在意識とは違ふのである。潜在意識とは意識面にない心理である點に於いては無意識と同じであるが、それは靜的なもので、例へば河底に落ちた小石のやうに、これを拾ひ上げるものがなければ、自發的には浮び上つて來るものではないが、精神分析の所謂無意識とはもつと能働的なもので、それは意識面から落下したものではなく、意識面にある事を好まれないで、そこから無理に押込められたもので、それは何時でも意識面へ出よう出ようとしてゐるものである。例へば、ゴム風船を匣に入れておくやうなもので、蓋さへとれば何時でもフワ〳〵と浮び上らうとするのである。も

つと適切に云へば、獄屋に監禁されてゐる罪人のやうなものである。看守の眼がなくなれば、何時でも外へ出よう出ようとするものである。精神分析は心理を動的に見るので、その點、從來の心理學の心を靜的に見るのとは違つてゐる。動的見地の條を參照されたい。

このやうに無意識界にはさまぐ\な能働的な、自發的な力を具へた心理が閉込められてゐるので、これを監視し「抑壓」„Repression“しておくためには、我々の心はなかく\の大きな努力を費さねばならないのである。我々の神經衰弱や神經症は多くはこのために生じて來ることが精神分析の結果分つて來たのである。つまり現實生活に不適當なものが押込められるわけであるが、現實生活に「不適當」なものばかりでなく、當面の生活に「不必要」なものも「片付け」られる（「押込め」られるでなく）と私は思ふ。これは心理經濟の原理からなされることゝ思ふ。かゝるものは、それ自身能働的に出て來ようとするものでないから、これを「押込め」るために特に心的エネルギーを用ゐる必要がない。從つて神經症の原因とはならない。

現實生活には不適當であるために無意識界に抑壓されてゐるさまぐ\の思想や願望は、意識面へ出てその人の行爲を支配しようく\と常に努力してゐるが、意識面では反對にこれを出さ

せまい〳〵としてゐる。この意識と無意識との不斷の鬪爭からして本人の精神と神經とは不健全となるのであるが、大抵の場合はこの二つの精神的勢力が何等かの點で妥協するのである。或は代償的なもので滿足すると云ふやうな事にもなるのである。

で、この二つの勢力の鬪爭を蒸汽と汽罐とに比較して見ると、よく分るやうに思ふ。汽車の進展の方向は線路に依つて決定されて居ようが、その動機は蒸汽力にある。優秀な機關車に於いては猛烈な蒸汽力を抑壓する汽罐の閉鎖が非常に嚴重なものでなければならない。汽罐の閉鎖が嚴重なものであればあるほど、汽車の突進力は强いであらう。從つてその蒸汽力を息ぬきしなければならない必要も大であらう。蒸汽力は膨脹せんとし、汽罐は抑壓せんとし、その緊張した相反相尅の兩勢力の戰ひの激しいほど、息ぬきとしての汽笛の音も高く朗かであらう。個人や民族が若く（汽罐が新しく）優秀（上製）であるほど蒸汽力（リビドー）も閉鎖力（抑壓）も强烈である。從つて汽笛（夢、文學）の息ぬきは必要であり、また盛んである。

我々の生活に對する夢の關係は非常に複雜であつて、右に述べて來たゞけではまだ不十分であるが、慥にそこに息ぬきとしての意味のあることは疑ふべくもない。夢と文學と酒とがなか

つたならば、人間はもつと〳〵多く發狂してゐるであらう。

とにかく夢なるものは、我々の理性に依る抑壓（検閲）が最もゆるんでゐる時、卽ち睡眠中に生ずるものであるから、夢を硏究し分析して見ることが、その人の無意識を知るに最も適切な方法であると共に、またその人の神經症を治療するに必要な手段でもある。

分析者は患者を扱つてゐて、どうして治つたか分析者自身にも分らぬことがあるものである。患者自身には勿論分らぬことがある。これは病根それ自體の方が分析者の意識せぬ内に急所に觸れられて、根こそぎ取去られるためで、かう云ふことは肉體上の醫術にあまりないことである。

前には無意識と潜在意識との區別を論じたが、無意識と意識との區別に就いても、一言云つておきたい。いろ〳〵の相違點もあるが、殊に重大な一つは無意識のアムビヴレンツ Ambivalenz と云ふことである。これは相反並存的感情と私は譯し習はして來たが、これは人間の無意識心理の中には意識面に相矛盾したものとして理解せられる二つが平氣で一つになつて存在してゐると云ふことである。例へば愛と憎、善意と惡意、尊敬と反抗心、快樂と苦痛などは

意識面からすれば一致し難い二つであるが、無意識では一つになつてゐる。芥川之龍介の小說『齒車』の一節に、作者が云はゞ自己分析をしてゐる個所がある。曰く
「善人かと思へば惡人でもあるしさ。」
「いや善惡と云ふよりも何かもつと反對なものが……。」
「ぢや大人の中に子供があるのだらう。」
「さうでもない。僕にははつきり云へないけれど……電氣の兩極に似てゐるのかな。何しろ反對なものを一緒に持つてゐる。」と。
さうして實際この心理を作品の中に描いたのが『鼻』と云ふ小說である。鼻長くして不具に近い僧に對する周圍の者等の同情は、一度その鼻が短くなつてしまつ後には逆轉して殘酷な嘲笑となるのである。人間は相手に自分を同一化しない限りは、相手の不幸を喜び幸福を面白く思はぬと云ふ誠に困つた惡德を具へた生物である。精神分析は人間を性惡と視ると云へよう。
無意識の特質としては、實はフロイドは（一）矛盾なるものを知らぬこと、（二）時間なるものを知らぬこと、（三）心理的初步過程、（四）外的現實に代償せしむるに心理的現實を以てする

こと、などを擧げてゐる。右に述べたアムビヷレンツは第一の特質の一種である。心理的初步過程に就いては第三章に於いて詳說する。

とにかく無意識なるものは非常に廣大な心理的領域で、我々は意識して行爲してゐると思つてゐる場合でも、實は無意識に支配されてゐる事が甚だ屢々あるものである。アメリカの教育心理學者にして精神分析を最初に米國に輸入したスタンリー・ホール Stanley Hall の言葉に、無意識は氷山の水中に沒してゐて眼に見えない部分の如きもので、これは水面上に表れて眼に見える部分（意識）の幾層倍かの大きさのものであると云ふのがある。誠に至言であつて無意識は單に我々の個人生活だけに卽して生じたものではなく、生物として人類としての長い長い心理生活からも傳統的に生じて來てゐるもので、これを研究探索することは今後の人間の最も緊急な務めでなければならない。

第二章　精神分析の科學性

(I) 科學とは何ぞや

第一章に於いて既に我々は、科學としての精神分析の何たるかに就いて大要を述べて來たつもりであるが、精神分析の對象である無意識心理なるものが、從來の諸科學の對象であるところの目に見える、手に觸れるものとは違つてゐるので、さうしてそれはまた古來神秘思想や宗教思想が專らこれを取扱ひ、科學には齒の立たないものと考へられてゐた對象の事であるからか、なかなか普通一般の人々（のみならず所謂科學者や哲學者でさへも）はその科學性を認めるに骨が折れるらしいのである。それには固より、對象が特殊であるだけにそれを取扱ふ斯學の方法にも特殊なものがあると云ふ點もあるにはある。で、私はこゝで、斯學の科學性並びに

その科學としての特殊性を明かにしておかねばならない責任を感ずるのである。

一體、科學とは何であるかと訊かれると、人々は存外よく分つてゐないのである。科學と云ふものは何でも目に見え手に觸るものを數量的に認識することであると云ふ風に漠然と考へてゐる。實驗でもして統計でもとつて尤らしく、無味乾燥な外觀を具へてゐればゐるほど、それは科學的だと思つてゐる。その尤らしい科學面の中に如何に空想的なもの、あやふやなもの、胡廊化しなものが混入してゐても、そこまで觀破する力は普通の人々（平凡な所謂科學者をも含めて）にはないのである。科學とはあくまで客觀的な態度を云ふのであつて、必ずしもその形式ではない。あくまで原因結果の關係に依つて現象を見る態度を云ふのであつて、少しでも科學者の主觀的傾向や願望の入込まないことを云ふのである。かくして事實の「說明」を目的とするのであつて、その「價値」を定めることの目的とは全く無緣である。

まづこのやうな態度を決定しておいて、次に一定の對象を限定する。さうしてそのやうな限定せられたる對象に對して右の如き態度を以て臨む時、その對象の性質に應じて一定の方法が確立せられる。で、精神分析の對象とは第一章の第一節に云つたやうに無意識心理現象であ

り、その方法とは、獨特の分析法である。嘗て『文藝春秋』子は、大槪が「偏執的にフロイド研究を適用してゐるのは面白い。たしかに一つの觀點だ。然り僅に一つの觀點だ。」併し「一つの眞理を絕對的のもの」と考へるのは「背理よりも始末が惡い」と云つて私を批評したことがある。併し「僅かに一つの觀點」に非ざる科學的見地なるものはない筈である。何故に科學と云ふ名があるかを考へて見たつて分る筈ではないか。科學の知識とは、分科せられたる知識である。綜合せられたる知識ではない。科學は一定の對象を假定し、一定の方法を以てその對象に臨んで得たる認識である。一定の對象と一定の方法との確立せられざるところに、科學はないのである。同一の物象でも別々の科學から見れば別々の對象である。假令ば人間も經濟學から見れば經濟人であり、心理學から見れば心理人であり、社會學から見れば社會人であり、生物學から見れば生物であり、醫學から見れば有機體であり、倫理學から見れば人格であり、精神分析から見れば無意識心理人である。＊

註＊　フロイドは科學の一面性についてかく云つてゐる。「それ自身に於いては、實は、あらゆる科學は一面的である。科學は一定の內容、見地、方法に限定されてゐるのであるから、その一面性は實

に必然的である。一つ科學に依つて他の科學を難ずる如きは、これ愚の骨頂であつて論者の如きはこのやうな愚に參與することは眞つ平である。物理學は化學の價値を否定しないし、また物理學は化學の代理にはならない。さりとて化學を以て物理學の代理にすることも出來ない。精神分析は無意識心理の科學として、慥に特殊の一面性を具へてゐる。このやうに一面性は醫術的科學の當然の權利であるから、これを否定するわけに行かない。」」（拙譯「療法論」一八九頁）

このやうに分化せられ、假定せられたる一定の對象に、科學は如何なる方法を以て臨むかと云ふに、即ちその對象内に起るさまぐ〱な現象と現象との間に或る種の關係を發見せんとするのである。判然と云へば、因果關係を發見せんとするのである。即ち原因となつたと認識せられた一定の現象と、結果となつたと認識せられた一定の現象との間に關係を認めることが、因果關係の發見である。さうしてまたもしこれが可能である場合には、人爲的に一定の現象（原因）を作ることに依つて、豫期せられた別の一定の現象（結果）の生じ來ることを認めようとするのである。これが即ち、實驗である。もしこのやうに、實驗が豫想せられた結果を生んだならば、その事實は當該科學に於いて眞理として確立せられることになるのである。つまり、

科學はその假定せられたる對象內に於いて因果關係が働いてゐる、因果法則が支配してゐると云ふ事を豫想（Voraussetzen）するものであつて、このやうな豫想は、實に科學の根本的要件（Postulat）の一つである。

さきに擧げた、世界（自然）は個々の學的對象（生物現象とか、我々の只今の興味（インテレスト）から云へば無意識心理現象とか云ふ如き）として想定され得ると云ふのは、また別の要件（ポスツラート）である。

さうしてまたこれ等の因果關係と、自然分化可能觀とは、その對象に卽いての範圍內に於いて、如何なる時と處とを問はず妥當すると云ふのが、第三の要件である。假りに、これ等三者を英和兩文を以て表はして見ると、かうなる。

1. Law of causality. 因果法。
2. Diversibility of nature as definite object of each science. 自然は各種科學の一定の對象として區分し得べきこと。
3. Validity of the two postulates above given over time and space. 以上二つの要件は時間空間を超えて妥當し得べきこと。

即ち、科學は三つの要件の上に成立つてゐる知識であるから、その眞理は條件つきの眞理であつて、絕對的のものではない。「僅かに一つの觀點」であるが、悲しいかな、人間は「僅かに一つの觀點」からの知識でなければ持てないやうに出來てゐるのだ。絕對的の眞理は神樣以外に知ることは出來ない。『文藝春秋』子が分析的見解を「絕對的の眞理」と思ふのは「背理より始末が惡い」と云ふのは、問ひに落ちず語るに落ちてゐる。彼は科學の何たるかを知らない。人間が絕對的の眞理を知らうと思へば、それより前に、人間が神樣と同一化しなくてはならない。さうなれば、絕對的の眞理を知ることは出來るが、その代り、その眞理はドグマであり、信仰であり、神秘思想であつて、正しい意味での知識ではない。卽ち、我々は科學者であることをやめて、哲學者又は宗敎家とならなければならない。

以上は科學に就いての自分獨自の考察であるが、自分の一家言であると思はれるから、こゝにアーサー・トムソンがその著『科學概論』„Introduction to Science“ by J. A. Thomson (London, 1921) の中で云つてゐることを參照して比較して見よう。彼は『科學の基本的要件』の條下でかう云つてゐる。

「科學的方法の根柢に横はる基本的要件が一つある。その要件は、その眞實であることが漸次に確證せられて行つた。それは自然が統一されてゐる（The Uniformity of Nature）との要件である。この要件は細々した二三の要件に分割することが出來るが、即ち、事物の本質には不變性、安定性があつて、（Stablity in the properties of things）、それが科學の目的に役立つやうになつてゐると云ふことである。また、同じ立場、事情が不斷に反覆されてゐる（the same situations are continually recurring）と云ふことである。また自然の秩序の中には一定の道筋が存在し、その道筋には切目がなく、その道筋上で起る事柄は總て、その以前に起きた事物に依つて決定されてゐる（every event is determined by antecendent events）と云ふことである。」（七九頁）

即ち、トムソンは、（一）安定性と、（二）反覆性と、（三）決定性（因果律）とを擧げてそれを總括するに「自然の統一性」と云ふ名を冠してゐるのであるが、これを私の意見と比較して見ると、トムスンの與へた第二は、私の與へた第三と符合し、彼の第三は私の第一と符合することとは何人にも直ちに分る。が、兩者の相違は、彼が「事物本性の安定性」を擧げ私が「自然分

化可能性」を擧げてゐる點にある。が、「事物本性の安定性」は結局、「同一事情の不斷反覆」の中に包含され得るのでなからうか。が、自然分化觀可能性を擧げなかつたことは手落ちであらう。（他の個所で或は多分說いてゐるかも知れないが……。）

（II）種々な解釋の可能

精神分析學は科學であると云はれてゐるに拘らず、その硏究對象（無意識心理現象）に對して、（よしんばそれが一つであつても）さまぐ〳〵な（卽ち二つもしくはそれ以上の）解釋が可能であると云ふことのために、斯學の科學性を疑ふと云ふ人がある。藝術的科學と云ふべきであると云ふ人がある。併し藝術的科學などゝ云ふ概念は、それ自身矛盾の概念である。例へば「美しき醜」とか、「善良なる惡」と云ふが如き觀念は、詩的もしくは常識的觀念としては存在し得るであらうが、學的概念としてはあり得ない。

藝術はあくまでも主として空想（理性の參與はあるにもせよ）に依る主觀的創造であり、科

學はあくまでも主として理性（空想の援助はあるにもせよ）に依る客觀的斷定である。兩者は屢々同じ方向に進むことがあるにも拘らず、丁度汽車のレールの如く、永遠に相會することのない平行線である。これ等二者は常識的觀念に於いてのみ結びつけられるのであつて、學的概念としては完全に無緣である。

であるから、さう云ふ常識的觀念を以て精神分析學を理解することは、その人一個の個人的趣味、又は常識的解釋ならば、それもよいであらうが、學的命題としては意味をなさないのである。即ち、精神分析學は科學であるか、或はもし科學でないならば、哲學か、宗教か、藝術か、何れかに明白に所屬しなければならないのである。私の信ずるところでは、精神分析學は科學である。

（III）解釋と認識

併し精神分析學は科學であるに拘らず、一つの對象（無意識心理現象）に對して、二つ以上

の解釋の可能を容認してゐることは事實である。これは併し他の科學に於いては、斷じて見られない事である。これも事實である。それ故に精神分析學が特殊の科學であると云ふ事は容認せられるが、科學でないとか、或は藝術的科學であるなどゝ云ふのは、早計であるか、或は誤つてゐるが、一體解釋とは何であるか。解釋とは、一定の現象が、その原因と認識され得る諸の現象の內の何れかゝら生じた結果であると認識することとである。そこに解釋者（科學者）の能力（確に主觀性）が這入つて來ると共に、斯學それ自身の現在の發達限度に於いてと云ふ條件もまた當然豫想されてゐる。けれども普通の科學に於いては解釋と云ふことはない。認識があるのみである。普通の科學に於いて科學的認識とは、一つの現象と一つの現象との間に於ける因果關係の認識と云ふ事に外ならない。その因果關係が單純である。つまり精神分析學に於いては解釋を下すが、他の科學に於いては、認識を下す。解釋と認識との間の相違は、それぞれの對象內に於ける現象と現象との間の關係が單純であるのと、複雜であるのとの相違と、今一つは精神分析學が創成日なほ淺く、今や漸次に發育しつゝある若い科學であるがためとに因るのである。現に既に十分に發育しきつてゐる方面——例へば、夢の研究に於ける典型的な

夢の解釋の如き――は、既にもう解釋の限度を超えて、直ちに客觀的認識を下し得る程度に達してゐる。

併し他の科學に於ける認識とても、考へように依つてはまだ認識と云ふには隨分覺束ないやうなものとてないことはない。例へば、物理學に於いて物體の地上に落下するは地球の引力に因ると認識されてゐるが、これが果して認識と云ひ得るかどうか。一つの解釋に過ぎないのではないだらうかと疑へば疑へないこともない。引力說が自明であると云ふよりは、却つて他により適切な解釋がないから、姑くこれが物體落下の原因であると認識（實は解釋）されてゐるに過ぎないのであつて、もつと適切な原因が發見されるかも知れないと云ふ蓋然性は必ずしも否定しきれない。ところでこのやうに只今のところ恐らくは他に考へようのない地球引力說と雖も、萬人が日々そのためと解釋しなければならない現象を幾萬年の間見て來てをりながら、やうやくニウトンに至つてこれと解釋し得るに至つたに過ぎないところを以て見ても、この方面の科學に於いてさへも、如何に個人の能力（主觀性）と云ふものが有力な要素であるかは思ひ半ばに過ぐるものがあるのである。故に物理學と云へども常識的には、藝術的科學であると

云つて決して差支へはないのである。もし精神分析を以てどうしても藝術的科學であると主張したいならば……。もし兩者の別を立てるならば、物理學の方がより單純な科學であると云ひ得るに過ぎないのである。

(IV) 科學性の複雜

精神分析學はその對象に對して種々な解釋を下すことが可能であると云ふことは、前に述べたやうに、(一)その對象を支配してゐる因果關係が複雜であること、(二)精神分析學が生育中の新科學であつて普遍的原則が未だ確立せられてゐないこと、(三)他の科學より以上に科學者(分析者)の個人的能力が大きな働きを及ぼし得べきこと……。これ等三つの理由に依るのであるが、その第一の項(因果關係の複雜性)に就いて、なほ少しく說明を附加しておきたい。

例へば、夢の中に於いて、我々は屢々そこに現れたのが父であつたか、先生であつたか、山であつたか、城であつたか……何れであつたか判然しないが、併し何れかであつたと云ふが如

き場合に遭遇する。そのやうな場合には、斯學に於いては、その何れもが妥當すると斷定せられる。それは父でもあり、先生でもあり、山でもあり、城でもあると云ふ風に解釋すべきであるとフロイドは教へてゐる。即ち、「二者選一」entweder oder は「並びに」und と解すべきだと教へてゐる。換言すれば、我々の現實（意識）生活に於いては、山は山であつて城にあらず、父は父であつて先生にあらずと云へるのであるが、空想（無意識）に於いてはこれ等兩者はそれ〴〵にコムプレクス（錯綜）されてゐる。山であつて同時に城であることは、そこでは決して矛盾しない。父であつてまた先生でもあることは少しも差支へがない。無意識世界に於いては意識界の法則（現實原則）は全然通用しない。日本の紙幣はそのまゝの形でアメリカへ持つて行つたのでは通用しない。アメリカの貨幣に換算しなくては駄目だ。意識界は現實原則が支配してゐるが、無意識界は快樂原則が支配してゐる。「二者選一」entweder oder その他一聯の意識國の通貨は無意識國には通用せぬ。意識的形式論理學に於いてはA＝Bと云ふ命題は、AはBのみにしてそれ以外の何れにも非ずと云ふことを、同時に意味してゐるが、無意識界に於いてはA＝Bと云ふことは、A＝C、A＝D……等々と少しも矛盾しない。＊

註* 我々が精神分析學に理解のない人に分析學の話をして聞かせてゐて一番困ることの一つは、無意識の論理過程を話して聞せてゐるのに、意識の論理過程を取出し、「だつてかう〳〵云ふ事があるじやないか」と「反證」を擧げて論駁せんとして來ることだ。「反證」などと云ふことは、A＝Bが同時にAはB以外の他の何物にも非ずと云ふことを意味し得る意識論理學にのみ適用し得べきことで、無意識論理學には不通であることを知つて貰はねばならぬ。

こゝに只今の問題を闡明するに誠に適切な一つの興味ある寓話がある。或るところに一人の花嫁があつた。彼女に對して二人の若い求婚者があつた。一人の青年はお金持ちであるが、あまり身持ちがよろしくなく、且つ才能にも乏しかつた。今一人は貧しかつたが、人格才能共に優れた立派な青年であつた。その花嫁は何れに嫁すべきか、去就に迷つてゐた。母親は娘の決心を訊いたが、笑つて答へない。恥づかしいためであらうと思つて、母親は一策を案じ、第一の青年と定めるならば右肩を、第二の青年に定めるならばその左肩を脱いでゐよ、さうすればそれに從つて先方に返事をするからと云つて、少時その座をはづし、程經て娘の室をのぞいて見ると、驚いた事に娘は双肌を脱いでかしこまつてゐたと云ふ。

彼女の無意識には（誰の無意識でもさうだが）二者選一 entweder oder は通用しないのだ。

金があつて、才能人格があつて健康で、美貌で……と云ふのが、あらゆる結婚者の當然な願望でなければならない。快樂原則の支配する無意識空想も、懲れ、現實界に出ようとしてはたちまち現實原則の冷たい鐵則（二者選一はその一に）依つて粉碎されて了ふのだ。

（V）重複決定

であるから、無意識現象に於いては、因果關係とてもXなる結果は必ずしもAなる單一原因からばかり生じてゐるとは斷言出來ない。そこに同時にB、C、D、などどれほど他の多くの原因が働いてゐるかは分らないのである。この現象を精神分析學では「重複決定」又は「過度決定」Überdeterminierung, Over-determinaton と云ふ術語を以て呼んでゐる。卽ち、一つの現象（結果としての）は一つもしくはそれ以上の原因に依つて決定せられてゐるとの豫想を意味してゐるのである。

これほど複雜な對象で無意識心理現象はあるのであるから、これを一個人の分析者が完全に

解釋（認識）すると云ふことは、實はなか〳〵容易でない。その分析者の個人的才能（又は現實生活に支障なき程度に殘つてゐるコムプレスクと云つてもいゝかも知れない）が如何に偉大で優秀であらうとも、人類の精神生活の過去現在の全般を包括してゐるエスを（よしんばそれが、一個人に現れてゐる場合にもせよ）完全に解釋（認識）し盡くすことは殆ど不可能に近いほどであらう。そこに於いてかさま〴〵な解釋が可能となつて來るのである。A分析學者の氣付かぬ關係を、B分析者は氣付くと云ふことも固よりあり得ることだ。併しそれ〴〵の解釋は、それの交渉する範圍内に於いて、何れもみな正しく妥當すると云へないことはないのである。波長のそれ〴〵に違ふさま〴〵な電波を普通のラヂオセットで受付けることは一寸困難であらう。只今のところ、大抵はまづ第二放送位までが關の山となつてゐる。

實例を擧げて説明して見よう。『竹取物語』の分析解釋が課題として與へられてゐるとしよう。

一、或る人はこれを「養子空想」の傳説であると解釋する。竹取翁夫妻が實父母でありながら（その證據はある）赫耶姫は彼等を假りの親であると思ひ、自分は天上月界の生れのもので

あると思つてゐる。ナルチスムスのそのやうな顯現として、この解釋は固より當つてゐる。この點に於いて、桃太郎傳說と共通點がある。（桃と竹との相違）

二、次にナルチスムスの別種の顯現として男嫌ひの傳說であると解釋する。これも當つてゐないことはない。現に類例として「手古奈」傳說がある。西洋にも結婚を忌避して氷河中にわが處女性を葬つて了つたと云ふ傳說がある。

三、更にリビドー拒否（解脫思想）の傳說と解することも出來る。手古奈傳說や羽衣傳說や袈裟御前の傳說もこの一面を有してゐる。

四、最後に、當然、第三と聯關して、死の本能の傳說であると云ふ解釋も下される。羽衣傳說や雪姬傳說にも多少の聯關があるやうに思はれる。

以上はたゞこの傳說に於ける赫耶姬に卽してのみの分析考察の諸方面であるが、更に翁夫妻や求婚者たちに卽しての解釋も、當然試みなければならないことになつて來る。さうしてそれ等には、現存人間の種々な心理現象に就いての實驗結果が比較參酌されなければならない。その如何に複雜な仕事であるかは、察するに餘りがあるであらう。

であるから、精神分析法は非常に骨の折れるものであることが分る。相當優秀な分析者と雖も神ならぬ身の、時に間違つた解釋を下すことがないとは保し難い。況んや驅け出しの未熟者が屡々滑稽な、單純な、こぢつけ的分析解釋を下して人を馬鹿々々しく思はせる場合も固より多いであらう。（但し一寸斷つておくが、分析は當つてゐても、その被分析者に於いて抵抗の強い場合には馬鹿々々しく思へる場合もあるのである。故に、分析解釋は被分析者には容易に打明けないのが、分析處置法の要件の一つとなつてゐる。）併し何れにもせよ、分析學に志すものは、相戒めてゆめ輕卒なる判斷を下さないやうにしたいものである。

（VI）個人的偏見を恥ぢよ

併しそのやうに、時に間違ひがなされる故にとて、斯學の科學性を疑つたり、否定したりすることは早計である。そんなことを云へば、他の如何なる科學とてもそれを應用する者に於いて多少の過誤を犯すことの絕對にないと云ふ如き科學は考へられないではないか。現に、醫

學に於いても、醫師の誤診は毎日のやうに行はれてゐる。醫者とは官許殺人業であると云ふやうな自嘲的な事を云つてゐる者さへ醫者仲間には澤山ゐる。氣象學とて同樣である。中央氣象臺の報告が正確に適中することもあるにはあるが、中らぬ場合とても甚だ多い。生水を飮む時に「氣象臺々々々」と三度口で云つて呑めば中毒せぬと云ふやうな迷信さへ行はれてゐる。或は今に「精神分析々々々」と三度唱へてカルモーチンを飮めば死ぬことはないなどゝ云ふいやがらせを云ふ者も出ないとは限らない。併し我々はそれくらゐの惡口ではへコ垂れない。丁度多數の籔醫者が如何に屢々誤診をなし、官許殺人を敢てしようとも醫學が科學であるとの嚴然たる事實を覆すには足りないのと同じであるからだ。天氣豫報が半分も當らなくとも、氣象學の科學としての價値に動搖を來すことは決してあり得ないのと同じであるからだ。時々の誤てる分析の故にとて分析學自體を否認せんとすることは、これ「抵抗」の一種であつて、その根抵に個人的感情の存することを自覺したならば、さういふことを彼等は自ら恥づかしいと思ふであらう。もし彼等に恥づる能力があるならば。

第三章　精神分析の機能

精神分析とは如何なるものであるかと云ふことが大體右の論述で呑み込めたとするならば、次に精神分析は如何なる機能を有するものであるか、と云ふことを知らねばならない。精神分析の機能としては大體次の四つが擧げられる。

一、正常及び病的の無意識心理現象を記述し、或はそれに對して實驗すること。

二、この實驗や事實に基いて無意識心理の働きに就いて種々の理論を樹立すること。

三、その理論に基き病的心理を正常に治癒すること。

四、以上の事實と理論とを應用して、他方面（藝術、宗教、政治、社會、法律、その他）の研究に資すること。

そこで、これ等の各々に就いて多少の說明を下して見る。

（I） 正常及び病的の心理

精神分析學はブロイヤー、フロイド兩家のヒステリーの研究から始まつたものであると云ふ起源的な意味からか變態心理學であるかのやうに考へられ、また現に今なほ或る種の教科書などには變態心理學の種目中に包含せしめられてゐるが、精神分析學は、屡々云つて來た通り、無意識心理現象を對象とする科學であつて、無意識的心理現象は健康者にだつて勿論あることであるから、それを扱ふ斯學は當然、正常心理學でなければならない。併し無意識心理に於いては健康者と患者とに於いては變りはなく、たゞ自我に依る無意識の統制が首尾よく行はれて現實生活が正常に行はれる限りに於いてその人は健康者と云はれるに過ぎないと見る點では、變態心理學と云はれ得るかも知れない。但し、精神分析學を變態心理學と云ふ人は、人間を全部變態心理者であると云ふ人であつて、それも或はその限りに於いては正しいかも知れない。

とにかく分析學の原理は異常者に就いてのみ發見せられたものではない。健康者をも研究材

料としてゐる。たゞ異常者、變態者に於いては(抑壓なき故に、或は抑壓又は昇華され損つてゐるが故に)より明瞭な形で心理特徴が出てゐると云ふに過ぎない。現にフロイドは、「精神分析は心理學の一部分である。また陝い意味に於ける醫術的心理學又は病的過程の心理學ではなく、當り前の心理學である」と云ふ。例へば、ナルチスムスの概念の如きも、從前の性慾學に於いては特種な自己戀慕症者(常に鏡を見て一人で亢奮してゐる如き性的變態者)をのみ云つたのであつたが、精神分析學に於いては萬人に存するリビドーの自己よりの發動又は自己への纒綿と云ふ概念となつたのである。故に。正常の意味に於けるナルチス(自己戀慕者)としては、萬人がそれに該當せざるを得ないのである。萬人に妥當する眞理を扱ふ限り、その心理學は正常心理學でなければならない。併しその眞理が特に變態者の心理を理解するに適切する限り、それは變態心理學と呼ばれることも許されるかも知れないであらう。どうしてもさう云はねば承知しないとならば‥‥。

こゝにナルチスムス(Narzissmus)と云ふ語が出たから、序ながら說明しておくが、この語はギリシアの神話中の美少年ナルチススの名から來てゐる。彼は己を慕ふ美少女エヒョー

ナ　ル　チ　ス　ス

(Museo Borbonico)

Echo（反響の意）の聲には耳を借さず水鏡に映る自分の姿に見入つてゐたが、水中の美少年はこれに近付かうとしても近付き難く、これを捕へようとしても捕へ得ないので、遂にこがれ死んでしまふ。そのあとから咲き出たのが水仙（ナルチスス）の花であつたこの神話の意をとつて自己戀慕症または獨尊觀念をナルチスムスと名付

けることになつたが、本來この語を始めて用ゐたのはネッケ P. Näcke（一八九九年）であつて、彼に於いてその意義はなほ遙かに限定されたもので單なる臨床用語として一種の變態性慾を呼んだのであつたが、フロイドの所謂ナルチスムスは我々萬人が、殊に現實生活の壓迫を受けない幼兒時代に於いて持つ心理的特質を示す語となつたのである。俗に云ふ「自惚とカサ氣のないものはない」ことは、科學的にも眞實であることが明になつたわけである。

（II）各種の理論

精神分析は人間の無意識心理を觀察し、實驗し、記述することに依つて、そこに支配してゐると想定されるところの種々の理論を樹立してゐる。例へば、「快不快原則」であるとか、「反覆强迫說」だとか、「生の本能、卽、死の本能」說であるとか、その他リビドー說、サド・マゾヒズム說、抑壓說、願望充足說、エディポス・コムプレクス說とか云ふ如きである。

それ等の內、精神分析學殊にフロイド說の特徵とも云はれ得べき五つの理論に就いて說明を

加へて見よう。その五つとは、（一）動力說、（二）リビドー說、（三）抑壓說、（四）ユディポス說、（五）生死本能說である。

（一）動力說——現象を靜的にでなく動力的に見ることは、現代諸科學の一つの共通特徵と云ひ得るであらうと思はれる。哲學に於いてはベルグソンの流動の哲學、社會科學に於いてはマルクス說、生理學に於いてはケーラー（Köhler）の說などがあるが、流動說としてはケーラーの唱道が最初であると云はれてゐる。生理過程が機構的條件に依つてと云ふよりは、寧ろ全體として神經中樞の分野に含まれてゐる力、卽ち動的條件に依つて決定されてゐると云ふ考へである。機械的（靜的）見地に對立するものである。動的見地に就いてはなほ後章（九二頁）を參照されたし。

（二）リビドー說——人間と動物とには性的慾望が存してゐる。これは事實である。この事實を云ひ表はすために、生物學では「性本能」なるものを假定してゐる。

これは食物攝取の慾望を云ひ表はすために「生存本能」が假定せられるのと一般である。生存本能あるために我々は食物を見ると喰べたいと云ふ氣持になる。それを通俗語として「食慾（ハンガー）」

Hunger と云ふ言葉で云ひ表はすが、性本能あるために性對象を見た時に起す氣持を云ひ表はす通俗語がドイツ語には缺けてゐるから、この缺を補ふために「リビドー」Libido と云ふ言葉をこれに宛てることになつてゐる。ところでこの性本能又はリビドーなるものはフロイドに依れば意味が非常に廣いので、單に男女間の愛と云ふには止まらないのである。プラトーンの所謂「エロス」と大體同じやうな内容を具へた概念である。つまり生命の創造と更新と結合とに向つて働く自然の力を意味するのであつて、もしこれを神が掌るとするならば、惡魔の掌るものは破壞である。ゲーテの『ファウスト』の中でも惡魔メフィーストフェレスが「私は一切を否定する靈である」と云つてゐるのはその意味である。

さうしてフロイドはこのリビドーなるものを質的でなく量的なものとして考へるのである。我々の心理の過程であるが、量的なものとして考へることに依つて性生活の現象を觀察し取扱はうとするのである。で、リビドーを殆どエネルギーと同義語であるかの如くに解してこれを對象に纏綿させるとか、或は再び自分の内に引上げるとか云ふ云ひ表はし方をするのである。

元來、フロイドは電流を比較豫想してリビドーなる概念を定めたのではなかつたかと思はれ

る。現にリビドーの纒綿の原語 Besetzung は「充電」のそれと同語であるから……。で、我々にまで好ましい對象にはリビドーを纒綿させ、好ましくない對象には纒綿させないと云ふのが快不快原則なのである。我々の無意識生活は大體この快不快原則に從つて快樂を追求し不快を逃避するやうに出來てゐるが、時々は不快と苦痛を反覆せんとする。これ、所謂反覆强迫の現象である。なほ、これ等の理論に就いては、後章に於いて別方面から言及する機會があると信ずる。

（三）抑壓說――つまり快不快原則と同じことである。愉快なことにはリビドーを纒綿するが、不快なことには纒綿しない、それを無意識本能的とする。例へば、勝手聾と云ふ言葉があるし、事實もある。それは不快なことにはなるべくリビドーを纒綿しないやうにするから、聞こえても聞こえないのであるが、自分にとつて愉快なことならば、隨分小聲で云つてもよく聞こえるのである。併しこの程度ならば、まだ「初步過程」と呼ばるべきものであらうが、「抑壓」と呼ばれるやうになると、も少し念入りになつて來る。つまり、現實生活に適當しない本能的なものが、現實生活の主體である自我に依つて無意識の底に押込められることを云ふの

で、フロイドは招かれて始めてアメリカに行つて講演した時に、非常に巧妙なる譬諭を以てこれを説明してゐるから、それをこゝに引用して見よう。

「今この講堂に、この聽衆に——その模範的沈靜と謹聽ぶりとに對しては、私は賞讃の辭を知らないほどであるが——私を妨害し、演題からの御注意をそらせようとして、不行儀に笑つたりお喋舌りをしたり、足音を立てたりする人が假りにあつたと想像する。私はこれでは講演を續けられないからと云ふと、諸君の內から力の强さうな人が數人立上つて、一寸競合つて後にこの邪魔者を扉の外に突出す。さうなると彼は『抑壓』されたことになり、私は講演を續けることが出來るやうになる。が、その退場者が堂內に入らうとしても、さう云ふ邪魔が二度と這入らぬやうに私の意志を實行して下さつた人達は、椅子を扉口に据えて、抑壓を完全にするやう、自ら抵抗として立つであらう。この室の內外を心理上の意識と無意識とに移して考へるならば、抑壓の經過に就いて判然とした觀念を持つことが出來よう」と。

(四) エディポス說——一體このエディポス・コムプレクス Oedipuskomplex と云ふ名稱はギリシアの傳說『テーベ王エディポス』の物語から出來してゐる。エディポスはテーベ國王

エディポスとスフィンクス
（ギリシア古瓶畫）

ライウスの子であつたが、生れた時、豫言者がこの子は將來父を殺し母と婚するであらうと云つたので、父王は、これを國境に遺棄せしめたが、それを隣國の牧羊者が拾つて育てゝゐる内に生長して、その國の王子となつた。エディポスは自分がやがて父を殺し母と婚するであらうことを豫言者に聞かされ、養父（實父と思つてゐる）の下に留るを恐れ、隣國に走らむとして知らずして隣國王（卽ち自分の實父）と爭うてこれを殺した。その國境に於いてスフィンクスに會して難問を掛けられ、

美事にそれを解いたのでその報賞としてテーベ王妃と婚したが、國內に惡疫流行したので神に伺ひを立てゝ見ると母と婚してゐる不倫の者が國政をとつてゐるとのお告げで、エディポスは己れの恐ろしい運命を知つて眼を抉り出して、娘にして妹なる女を伴うて荒野にさまよひ出でると云ふ筋である。

　この傳説を民族の夢として、夢の解釋法をそのまゝこれに宛てはめて見ると、この話の顯在內容としてはエディポスに罪なし運命の惡戲と云ふことになつてゐるが、その潛在內容としては父（又は同性親）を拒け或は殺し母（異性親）を慕ふと云ふ人類永遠の病根（コムプレクス）が表現されてゐると云ふ事に解せられるのである。コムプレクス（Komplex）とは本來ユングの造語で、「錯綜」又は「複合」との義であるが、これは人類としては原始時代に、個人としては幼兒時代に無意識に與へられたさま〴〵な經驗が定着し、その定着したものと他の類似の觀念とが無意識的に錯綜し、複合して、一方に伴うてゐる感情が他方に轉位してその他方が代償として症候的發現をなすやうになることを云ふので、これが俗に云へば癖となり、病根となつて、その人の行動を決定するやうになるのである。それ故にコムプレクスと定着とは全然違つたもので

あるが、今日ではこれ等兩者が屢々混同せられるらしく（西洋の分析者の間に於いてもさうであるらしく）フロイドはその嚴重な區別を主張してゐる。もし幼時に鱗のない海魚（章魚、海老の如き）は喰ふものでないと敎へ込まれたら（實際著者の友人にさう云ふ人があるのだ）一生その人はさう云ふ物は喰へなくなるのである。もし喰ふとやはり中毒するのである。これは化學的には證明出來ないが、心理的には眞實である。こんなのは最も單純明白なコムプレクスの實例であるが、エディポス・コムプレクスの如きは最も複雜深遠な種類の一つである。

エディポス・コムプレクスは單に現代文化人心理の分析的研究に依つてばかりではなく、野蠻人、未開人、原始人の風俗研究に依つても、到達せられた歸結であつて、後者に於いては トーテミスムスがそれである。トーテミスムスとはトーテム（民族の祖先として崇拜し畏怖する動物）を信奉することで、一年に一度これを屠り喰ひ、後に謝罪的な祭りを催す。その宗教的、道德的、政治的制度の全般を云ふのであつて、こゝにトーテムとしてあがめられる動物の觀念は現代文明人に於ける父の觀念の中に遺傳せられてゐるとせられる。

エディポス・コムプレクス說と密接の關係があり、且つフロイド說に於いて屢々學界の問題

となつたものは幼兒性感論であるから、この論に就いて、こゝになほ多少の說明を加へておくであらう。

生れたばかりの赤兒に於いては、その精神生活は全部が無意識であつて、リビドーは全身に瀰漫してゐる。それが外部に向つて放射されるやうになるのは、先づ口唇に母の乳房を含む時からである。それで食慾と性慾との起源は同一であると云ふのがフロイドの意見であつて、これフロイドの幼兒性感論の出發點である。彼は『性說に關する三論文』„Drei Abhadlungen zur Sexualtheorie"（1925）の中で、次のやうに論じてゐる。

「幼兒の性生活の最も著しい特質として、この本能が他人に向けられないと云ふことを我々は强調する。幼兒は自己の身體で滿足する。彼は、ハヴロック・エリスのいみじき造語で云ふならば、自己色情的 Auto-erotic である。次に明かなことは指をしやぶる幼兒の行動が、既に體驗したことがあり、且つ今や想起されてゐる一つの快樂を求めることに依つて決定されると云ふことである。皮膚又は粘膜の或る個所を律動的に吸ふことに依つて幼兒はやがて單純な場合に於いて滿足を得る。また幼兒が只今再經驗せんとしつゝあるこの快樂は、その最初の經

驗を得たのは如何なる機會に於いてゞあつたかは、これを察するに難くない。嬰兒にとつて最初の人生に於ける最も重要なる活動は母の乳房（またはその代償）に吸付くことであつて、その事は既に幼兒にこの快樂を敎へたに相違ない。嬰兒の口唇は性的帶域としての働きをし溫い乳汁の流入することの刺戟は恐らくこの快感の原因となつたであらうと我々は云ふのである。抑々始めに於いて性的帶域の滿足は營養攝取の滿足と相伴うてゐたのだ。性的活動は最初に於いて生命維持のための機能の一つに已れを托して、後になつてそれから獨立するのである。存分に乳を吸つた嬰兒が乳房を離し、兩頰を眞赤にし淨福な微笑を湛へて眠りに入るのを眺めた者は誰しも、この様子が後年に於ける性的滿足の表現と同型なる事を認めざるを得ないであらう。」と。

やがて口唇から這入つたものは肛門及び尿道に排泄せられるので、肛門及び尿道の方に性感が發展して行く。遂に尿道から性器に至つて、その主權の下に性感が支配せられてから性生活に於ける一人前の人間が出來上るわけである。性器に性感が十分に移つて了はないと、不感症（女）となり不能症（男）となつて、性生活に於ける不健全や變態が生ずるわけである。

要するに幼兒性感の特徴は三つあるわけである。(一)性本能と食本能とが一つになつてゐること。(二)自己色情的で必ずしも對象を要せぬこと。(三)性帶域が口唇、尿道、肛門に分割されて性器の主權の未だ確立せざることである。

(五)生死本能說――生の本能はエロスの本能、又は結合の本能とも云はれ、個人をして社會に於ける現實生活をなさしむる本能であるが、死の本能とは肉體(ゾマ)をしてその包藏する性殖細胞を次代のゾマに移してそれ自身元の無機物に還元せんとする本能であつて、これ等兩者は、一見相反するものの如くであるが、畢竟するに同じものゝ別々の形に現れたるに外ならないのであつて、互に他を支持し牽制し合ひつゝ自然の定めた一定のコースを辿りつゝ、遂に人間の本來の狀態たる無機物へと還元せんとする。それが人生の姿である。死の恐怖はその一定のコースを踏外すことの不安である。自殺は兩本能の釣合が破れて死の本能の勝つた場合である……と云ふのである。この死の本能說は歐洲の哲學思潮には餘程調子の違つたものであるらしく分析者仲間にも反對者が多かつた(英國のアーネスト・ジョーンズの如きでさへその一人)さうであるが、只今では全く一般的に承認せられたらしい、とにかく、我々東洋人には

非常によく分るやうに思はれる。佛教で云ふ寂滅爲樂の思想などは正にこの死の本能說に合致するものである。つまり、涅槃に入ることを意味するので、實際に涅槃原則 Nirwanaprinzip と云ふ言葉を用ゐてゐる分析學者（英國女流分析者バーバラ・ロー）もあつて、フロイドはこの用語を承認してゐる。

（II）病氣の治療

理論は觀察と實驗と考察とに依つて生れ、却つてまた觀察と實驗と考察とを助長する。フロイドが實行し且つ自ら精神分析と名付けた療法は、彼がその先輩ブロイヤー J. Breuer と共に始めた、かの『洗流し精神療法』das Kathartische Verfahren とも云ふべきものに發源してゐるのである。當時にフロイドがブロイヤーと共著でこの報告を試みたものには『ヒステリー研究』Studien über Hyterie（1895）があるが、後五年フロイドが單獨に發表した『夢の解釋』Die Traumdeutung（1900）に於いてはこの『洗流し的精神療法』から一步を進め

て、精神分析法となつてゐるのである。そこで一九〇〇年を以て精神分析發祥の年とするのである。洗流し法は催眠術を用ひ催眠中に意識が擴大せられてゐる狀態を利用して、病根が始めて植えつけられた當時の心理狀態を復活せしめて、つまりその當時の感情を再經驗せしめることに依つてその病根を取除くと云ふ遣方で、その特徵は病氣が、醫師の細工に依つてと云ふよりは、患者自身の感情の再經驗に依つて自然に治ると云ふ點にある。前章にも一寸言及したやうに醫師の知らぬ內に自然に治つてゐることがあるのはそのためである。フロイドは遂に催眠術的暗示に依るこの洗流し療法をやめて、自由聯想に依る精神分析法を創案したのであるが、これは愈々醫師の細工（暗示）を廢して病根をして自ら發散霧消せしめる方法を徹底せしめたものであると云ふことが出來る。

例へば、こゝに雷を病的に恐がる少女があるとする。この恐怖症を治してやらうとするには、まづ彼女を安臥せしめ、分析者は彼女と眼と眼を見合はせる事を出來るだけ避けて（でないとさまぐ〵な暗示を與へるから）彼女をして雷についてさまぐ〵な聯想を全く自由に、寧ろ出鱈目に語らしめる。また、彼女の常に見る夢の話をなさしめる。彼女は屡々黑猫の夢を見る

とする。やがて、彼女は三歳の時分に二階の欄干に凭れてゐて黒猫が隣家の屋根から現れたのに驚いて逃げようとして階段の上から落下した經驗のあることが、母親に依つて告白される。その事實が母親や分析者によつて語られ、本人がその事實を「知つた」だけでは駄目である。その時の恐怖の感情が分析的手段により何とかして彼女に於いて自動的に再經驗（意識化）されるとする。すると彼女の雷恐怖症は治療されると云ふことになる。彼女の無意識に於いて自己の落下と云ふ事と、雷の落下と云ふことゝが病根的に錯綜されてゐるので、一方の感情が發散されると共に、それと錯綜されてゐる他方の感情もなくなると云ふわけである。但しもしこの場合抑壓の機制が働いてゐるとすれば、それは道德的、審美的の建前からでなく、リビドー經濟の建前からであらう。併し墜落恐怖と云ふことの中には性的墮落願望が殆ど常に含まれてゐるから、その恐怖の中に道德的、審美的動機からの抑壓機制が混入してゐないと云ふことはないであらう。

一體、病氣が癒ると云ふのは、どう云ふことであらうか。それは、病源が除去せられると云ふことでなければならない。併し、病源が除去せられると云ふことは、外科醫の方ならばとも

かく、内科醫や精神醫の方ではなか〳〵むつかしいことで、内科の藥療法と云ふことは、毒（藥）を以ひ毒（病）を制するのでなかつたならば大抵は、病氣の個所を痲痺させるか、或は病的個所を克服させるやうに他方の働きを刺戟するとか云ふ、極めて消極的なことしか出來ないものである。精神分析で心の病氣が癒ると云ふのは、これまた精神の外科醫として病源（コムプレクス）を取去るのであるが、（催眠術に於いて用ゐられる「暗示」は精神上の藥劑と同じ働きを意味するものだらう）、それはつまり心の組立の具合が惡くなり、そのためにリビドーの出し入れが甘く行かなくなり、從つて腐りついてゐるので、その心の組方を建直し、從つてリビドーの利用が合理的に行くやうにすると云ふわけである。例へば、鉢植の木に水をやるにしても、その根本に注ぐべき水を鉢の外に撒いてゐたのでは、木も枯れるし水も空しく腐ると云ふわけである。それをうまく木の根元に適度に注ぐやうに水の位置をかへると云ふのが分析法である。金の使用に例へるならば、一定の資本はこれを投資して利益を上げ、それに依つて生活を支持すると共に餘分を更に資金に繰込むと云ふのが健全な使ひ方であるが、不健全な使ひ方は回收のつかない事に投資したり、或は投資すべき金を全部借金の利子に支拂つたりする

ことである。但し、もし回收し得べきやうな投資道が全然ないと云ふやうな場合は、それはその人自身の病氣ではなく社會の病氣であると云ふことになるであらう。それは既に精神分析の埒外を超えるわけである。

然るに、精神分析は分析ばかりしてゐて綜合をしないから駄目だと云ふやうな、知つたか振りの批難をして來る人がゐる。植木の根元に水を注ぐべきホースの位置はこれを不適當なところから引離すと云ふだけでは駄目だ、根元のところへ持つて行つてやらねば仕方がないと云ふ人がある。併し、それは心の何たるかを知らない人の云ふ事である。ホースはこれを不適當なところから引離せば、自然に正當なところへ跳返る力を具へてゐるのだ。フロイドはさう云ふ愚問に對してかう答へてゐる。

「我々は患者を分析した。それはつまりそれを要素的（エレメンタール）な構成部分に分解することであり、これ等の本能要素を一つ一つ彼の内に指示したことである。さうなれば、我々は、彼がそれ等の要素を新たに、もつとよく構成し直すことに助力してやらねばならぬと要求せられることは、固より當然でなからうか。諸君も御存知の通り、實際我々はさう云ふ要求を受けて來たのであ

る。病的精神を分析する以上は、次にはこれを綜合して貰はねばならないと、我々は聞かされて來た。さうして、やがてまたそこへ別の心配も加はつて來て、分析者は無暗に分析するばかりで、あまり綜合と云ふことをやらないと云ふ。精神治療の效果をこの綜合に、云はゞこの解剖に依つてバラ〳〵になつたものを何とか再建設することに、移せよと云ふのである。

併し、諸君よ、この精神綜合に依つて一つの新たな課題が生じたとは、私は信じ得ないのである。いさゝか失禮に亘つても正直に云つて差支へないならば、私はさう云ふ要求は無考へな言葉であると云ひたい。が、私は大人しくかう云つておかう。それはたゞ一つの比較を內容に頓着なく引延したものに過ぎないと、或は（かう云つた方がよければ）一つの名稱を不當に擴充したものに過ぎないと。併し、名稱と云ふものは、單に約束手形に過ぎない、それに類似した他のものと區別するための符徵に過ぎない。プログラム、內容品目、或は定義などではない。さうして比較は比較されたものに唯一點に於いて觸れてをればよいので、他の總ての點に於いてそれから遠く離れてをつても差支へないのである。心理は特殊な唯一的な或るものであつて、これを何か他の一つのものと比較してもその性質を的確に定義出來るものではない。精

神分析的操作は化學的分析と比較出來るが、併しそれと丁度同じやうなのはまた外科手術との間にも出來るだらうし、或は教育の感化との間にも出來るであらう。化學的分析との比較で、當らぬのは次の一點にある。卽ち、心理に於いて分析は、どうしても統一と聯關の方へ引きづられて行くやうな努力をなしつゝ行はれざるを得ないと云ふ點。一つの特徵を分離させ、一つの本能感情を關係感情の中から遊離させることに成功したとしても、それはそのまゝ孤立してはゐないで、直ちにまた別の關係の中に這入て行く。化學の分析中に於いても、これと全く同じやうなことは起るのである。化學者が强いて一つの分離をなすと同時に、彼の意志せざる綜合が（材料の親和力が今や自由になつたゝめに）完成せられる。

ところが實はその反對で分析者は綜合されたものを分析してバラ〳〵にするのではないのだ。神經病者は分裂したる、抵抗のために綜合を失つた精神生活を我々に提示するのである。さうして我々がこれを分析し、その抵抗を取除いてゐる間に、この精神生活は共同的になり、我々が自我と呼ぶところの大きな統一を、これまでは自我から分離し、別に結び付き合つてゐた本能感情にまで齎すやうになるのである。で、分析を受けてゐる者に於いて、我々の干渉な

しに、自動的に、必至的に、精神綜合はなされるのだ。」

精神分析學は無意識心理を對象とする一つの科學である以上、病氣の治療はやはりその一つの應用に外ならないのである（フロイドもさう云つてゐる）から、正當ならば、これは次の項下に於いて論ずべきであつたかも知れない。で、應用論に移る前に、私はこゝに治療法としての精神分析學に就いて正當な概念を讀者に與へておくべき義務を感ずる。

精神分析學は、その父祖フロイドが醫家であつたゝめに、醫者でなくてはこれを研究するに、實施するに不適當なものであるかの如くに誤解されてゐるらしく、この誤解もまた斯學の健全な發達を阻害してゐる原因の一つではないかと思はれる。併し精神分析學は心理學であつて、醫學ではない。治療に關係するものは總て醫學の範圍內にある如く思ふのは、最も俗な考へ方である。フロイド自身が、既にかう云つてゐる。

「精神分析は心理學の一部である。また陝い意味に於ける醫術的心理學又は病的過程の心理學ではなく、當り前の心理學である。慥に、心理學の全體ではないが、寧ろその下部構造、恐らくは抑々その基礎である。精神分析はこれを醫術的目的に用ふることが出來るからとて、人

々は誤つてはならない。電氣やレントゲン光線とても醫術に利用することが出來たが、併し兩者はやはり物理學と云ふ學問に屬してゐる。また歴史的に考察して見ても、これ等の所屬は變更されない。電氣に關する學說の全體はその出發を神經筋肉装置に於ける觀察から始めてゐるが、それ故にとて今日では電氣が生理學の一部分であると主張せんとするやうなものは誰もない。精神分析に對しては、これが或る醫者に依つて、患者の惱みを助けてやらうとして發見されたものである事を人々は云々する。併しその事は斯學の本性を判斷するに就いては、どちらでもよい事である。また、この歴史的論考は誠に危險である。歴史的論考を進めて行く內に人々の想起すべきことは、如何に醫者なるものが始めから分析に對して敵意と憎惡とを以てこれを拒否したかと云ふことである。從つて、彼等は今日となつてこれを自分等に於いて壟斷すべき權利がないことになる。」（拙譯『分析療法論』三八五頁）

フロイドはかくまで極言してゐるが、彼が醫者たちから非常に迫害を受けたための個人的感情も多少はあるかとさへ、思はれるほどである。とにかく、斯學父祖が非醫者の分析を承認してゐるのであるだけ、非醫者はそれだけ自重して分析の實施に際しては、出來るだけ要愼深く

あらねばならないことも、反面に於いて、固より當然の義務となつて來る。

思へば、醫學そのものが、治療法の歷史から見れば新參者で、現在とてもその一部分に過ぎないのに、その全般であるかのやうに迷信してゐる。昔は、治療の事は專ら宗教家の任であつたのだ。それが近世に入ると共に、科學が片手落にも物的思想と結びついたが故に、病氣は肉體的のもの、醫療は肉體を扱ふものと云ふことになつてしまつたのだ。併し、宗教家が人々の精神の病を治癒した歷史はまた忘るべからざるものである。宗教家の治癒した病氣とは心の病である。さうして、精神分析は物的ならざる對象（心理現象）に科學的方法を適用するものである。その意味に於いて、精神分析は古代と近代との結婚であり、科學と宗教との握手である。物的ならざる對象に向つて、醫學的（科學的）方法を適當するものだからである。精神分析は、それ故にまた、醫學と宗教的治療法の兩者に向つて警告を發するものでもある。醫學に向つては、病氣が單に肉體的原因にのみ存するものにあらず、身心の相關々係に存するものなることを悟るべきを……。また宗教的方法に向つては、病氣が神樣や惡魔とは關係なく、患者自身の心理現象に外ならないものであるが故に、この現象の內に病原を發見し、その發見に基

いて、神秘的にでなく科學的に處置すべきものであることを……。

(IV) 理論の應用

精神分析の理論は種々の方面に應用することが出來るが、凡そ無意識心理の發現し得るところ、卽ち精神分析理論の應用の可能なる分野であると云ふことが出來る。

フロイドには『精神分析に對する興味』(一九一三年)と題する論文がある。これは二つの部分から成つてゐて、第一部は『心理學的興味』となつてゐる。卽ち、普通の心理學から無意識心理學たる精神分析への興味を論じたものである。第二部は『非心理學的科學に對する精神分析の興味』となつてゐて、細目に分つて——

一、言語學的興味　　二、哲學的興味
三、生物學的興味　　四、進化史的興味
五、文明史的興味　　六、藝術科學的興味

七、社會學的興味　　　八、教育學的興味

となつてゐる。まづこれ等の諸方面から精神分析は興味を持たれると論じてゐるわけであつて、第一の言語學興味としては、言語は元來、意識的に造り上げた學術語、法律語など以外は、民族無意識的に出來上つたものが大部分であるから、これを研究するには無意識心理學、卽ち精神分析學からすべきが當然であつて、その成果の如何に面白いものであるかは、到底簡單には述べられない。ほんの一例を擧げて見るならば、日本語の「ホコリ」には二つの意味がある。塵埃と誇りの兩義である。これは誰でも知つてゐるが、天理教の方ではかう說いてゐるさうである。

「ホコリと云ふ言葉は第一に『塵埃』の意義がある。第二には『虛傲』の意がある。第三に『名譽』の意味がある。で、ホコリを捨てるといふときには、人間のあらゆる虛傲、自力、造作を捨て、何か依て以つて立つ所の名譽や矜恃、よしそれが內的のものであつても、それを捨てよとの含蓄がある。夫等のものは、神の前には塵埃であるといふコトバの味がある。」と。

これは某氏の紹介である。併し同氏はこれも「甚だ多く出鱈目なこぢつけ」の一つであるかも

知れぬとの疑ひを殘してゐるやうである。

これは從來の常識人から見ると、全く「出鱈目なこぢつけ」に聞える。然るに、その常識人たちから最も信頼されてゐる『言海』を引いて見ると「ホコリ（埃）」は元來「誇りの意ならむ」とある。更に「誇る」を引いて見ると、「大ごるの約、廣ごる、と同意」とある。卽ちこれ等兩語は元々「大きく廣がる」の觀念から由來したものであることが察せられる。人に酒肴をふるまふことを「おごる」と云ふのは、自分の持つてゐる金が大きく廣がるの意であらう。併し寶を大きく廣げることは同時に埃のやうに捨てることを意味してゐる。卽ち元來同一觀念から派生して相反の意味となつた二語であるが、果して天理敎の敎へるやうに、神の前には「誇り」も「埃」と云ふやうな都合のいゝ敎訓的、道德的意味があつたかどうかは、なほ疑問だ。併し、某氏の疑はれるやうに「全然出鱈目のこぢつけ」ではなく、そこに多少の根據の存することだけは明かとなつたわけである。

が、道德的な意味と判然とは云ひ去れないまでも、（單なる觀念的意味でなく）價値感情的な意味がこの相反兩義の內に含まれてあつたかも知れないと思はれることは、昔の人の語感に

於いては、常に一語の內にその反對の意味が含まれてゐることが精神分析の研究に依つて明かにされてゐるからだ。卽ちエヂプト語に於いては、「强」と「弱」とは一語で表はされ、ラテン語に於いて高と低は一語で表はされてゐる。そのやうな例は各語に於いて無數に發見せられてゐる。（フロイドの『原始語に於ける相反兩義に就いて』を參照。）で、この場合も、名譽の如き高尙なものと、埃の如き無價値のものと、高低相反の二義を一語に含めたと察することは、必ずしも出鱈目だとは云へないのだ。

相反兩義が一語に代表されると云へばドイツ語の Boden は床とか土地とか土臺とか云ふ意味があると同時に、屋根裏の意味もある。上下相反が一語で意味される。さう云へば、日本語で屋上の事を屋根と云ふのはをかしい。床の事を屋根と云ひさうなものだが——。さう呼んだ時代はなかつたものかしら。『言海』では「家の上」の約音であると說明してゐるが、こぢつけに非ずんば幸である。では、峯（みね）や「高根」の「ね」はどう說明するかと尋ねられたら、大槻文彥博士も困るのではなからうか。

また文藝學的興味に關して一つの實例をわが國古典文學に就いて擧げるならば、『源氏物語』

の鑑賞批評を採上げることが出來る。

この小說の主人公光源氏の君の父君はそれがしの帝であつたが、この帝の最初に愛されたのが桐壺の更衣と云ふ女人。源氏はこの桐壺の更衣の子であるが、更衣は源氏を生むと間もなく亡くなつてしまつた。悲嘆のあまり帝はその後、絕えて他の女の許に訪れなかつたが、先帝の四の宮藤壺の女御が桐壺の更衣にそつくりだと云つて勸める人があつたので、源氏の父はその藤壺を入れることになつた。成程、桐壺にそつくりだと云ふので、帝の愛はその藤壺に移る。帝は藤壺の許へ通ふ際には、時折に源氏を伴れて行き、「母なき子を憐み給へ」、「亡き母によく似て居られる、母と思つて懷き親しめ」などゝ云つて聞かせた。そんなことを云ふものであるから、藤壺の方でも精神分析學の所謂「ヨカスタ・コムプレクス」を起すし、源氏の方でも「母コムプレクス」を轉嫁することになつたのであらう。いつしか二人は割なき仲となつて、その間に子まで生すやうになつてしまつた。この一事を以て見ても、男女の間の情事に親子(殊に母子)間の感情が色濃く裏付けられてゐるかを、察することが出來る。また初戀(源氏の父帝の場合においては桐壺の更衣を初戀人とすれば)の後の戀(この場合、藤壺)に於い

て、如何に初戀がその原型となつてゐるかを察する事が出來る。何となれば、帝は藤壺が桐壺に生寫しであると云ふ點に心を曳かれたのであるからだ。

とにかくその後の數々の戀愛に於いて、源氏は常に母の面影を慕つて行つてゐることは、何人も否定することは出來ない。併し『源氏物語』の作者は、その主人公の、平たく云へば色好みを、皮肉に云へば戀愛苦行を、是認し讃美してゐたと解するのは、いさゝか淺薄な見方であると云はなければならない。この小說の作者紫式部は、源氏の戀愛巡禮を冷靜な、客觀的な、寫實的な觀照態度を以て描いてはゐるが、作者の理想は何處にあつたのであらうか。作者はその理想を明白な言葉に出してはゐないが、作者としてはかゝる戀愛苦行者を寧ろ憫む心持があつたのではなかつたかと、私は想像する。人間は源氏の君に非ずとも、程度の差こそあれ、みな戀愛の苦行者である。戀愛を殺さず、戀愛に殺されず、よく戀愛と自己とを並せ生かす者こそ、最も賢明な生活者でなければならない。

何れにもせよ、『源氏物語』の作者も、戀愛を不幸にせず、幸福にするためには如何にしたらよいかを研究するために、こゝに光源氏の君なる一人間を捕へ來つて、それに一つの修業を

させて見たと解することが出來ると、私は考へる。源氏の君が幼兒時代から母性的なものへの憧憬を持つてゐて、それに促されて、たゞ盲目的に前へ前へと戀愛巡禮の道を辿つて行くのであるが、彼は最後まで、自分を前へ促進させる何ものか——我々には（さうして恐らくは作者にも）それが母性的なもの*と判然分つてゐるが——に就いて、全く無智であつたかも知れない。併し、一つ一つの靈場を巡禮する度に、一つ一つ彼の内心の何物か（コムプレクス）が解きほぐされ（發散され（アブレアギーレン））て行つたのではないだらうか。丁度、我々が現實に見る人々と雖も、一つ一つ戀愛の巡禮をして行く内に、いつとはなしに少しづゝは内なる原動力を半ば意識し（分析し）、それを支配することが出るやうになつて行くのと全く同じに……。

註 ゲーテの『ファウスト』の所謂「永遠に女性的なるもの」をこの場合、聯想せねばならない。

紫式部は恐らくこの母性的なものが『源氏』の主人公を支配してゐたことを意識してゐたのであらうと思はれる。何となれば、紫式部の時代（平安朝時代）に既に讀まれた天台宗の聖典（『倶舍論』）の中には、既に明白に、男兒は如何にその母を慕つてその父に反抗し、女兒は如何にその父を愛してその母を憎むかと云ふ意味のことが、論じてあるからである。さうしてそ

れを紫式部が讀んでゐたに相違ないと信ぜらるべきであるからである。佛典が既に千年の昔にこれだけのことを道破してゐることは、誠に驚嘆すべき事實であると共に、今日の科學精神分析が東洋から生れなかつたことを、我々は恥ぢねばならないのである。

以上は『源氏』の内容に關する分析研究であるが、その文章に關する研究と鑑賞とに於いても、如何に鋭い確實さを有するものであるかを左に實證して見よう。國文學の權威某博士の『源氏物語』への意識論的批評に對して、著者が更に無意識心理的（精神分析的）立場から再吟味を加へたいものである。同博士は五項目に分つて論じてゐた。

（一）源氏が須磨にさすらふ四五日前、朝早く左大臣邸から歸るところを寫して「明けぬればいいいい夜深う出で給ふに有明の月いとをかしういいいいいい……」（圏點は同博士所附、以下同）云々とあるところを博士は「明けて了へば夜が深くないわけで、また夜が深くては有明の月が存在し得ない筈だから……」と難じて居られるが、私は「夜（の思ひなほ）深う……」の簡約法であらうと思ふ。その前夜を如何に送つたかを調べて見ないと、確言は出來ないが。換言すれば、こゝは象徴的表現であると思ふ。否、博士の難じてゐられる源氏文章の晦澁不自然は、みな源氏の象徴的

表現を十分に同情鑑賞せられてゐないためでなからうかと考へる。

（二）更に程へて愈々源氏の立出づるところで「出で給ふほどを、人々のぞきて見奉る。入方の月いと明きに、いとどなまめかしう淸らにて……」云々とあるを「とくに朝日がきらきらと輝き出でてゐるわけであるのに、西の山の端に入りかけた月がいと明るいとあつては、まるで、季節時刻の觀念といふものがないやうに思はれる」と博士は云つてゐられるが、これは叙景の如く見せかけて、實は源氏の美しい姿を形容してゐるのに相違ない。「入方の月（の如く）いと明き」美しさと云ふ意味で、美男美女の形容に光り（殊に月光）を象徵的に利用することは古今東西その實例は甚だ多い。第一「光源氏」と云ふ名からして「美男源氏」の意味に外ならないであらう。

（三）同じ年の冬の一夜、須磨なる源氏が、物凄い荒れ模様の折に、琴、笛、唱歌に滅入る心を慰めつゝ都を偲ばれる所で、冬になりて雪降り荒れたる頃、空の氣色もことに凄く眺め給ひて、琴をひきすさび給ひて、良淸に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ。……霜の後の夢を誦じ給ふ。月いと明うさし入りて、はかなき旅のおましどころは、奥までくまなし。」と云

ふところを、「雪まで降つて殊に凄いといふ夜が、一寸の間に何のことわりもなく『月いとあかうさし入りて』はあんまりの急變であらうと思ふ。」と博士は云つてゐられるが、こゝもやはり叙景と見せかけて實は源氏の心持の動きを象徴的に表現したものでなければならないと思ふ。叙景に依る心境の表現は文藝技巧の常道で、その心理的契機はやがてまた詳論の機會があるであらう。その實例は古今東西の文學に殆ど充滿してゐる。小説から戲曲になるとこの技法は一層露骨になつて來る。博士は問題にしてゐられないが「霜の後の夢を誦じ給ふ」などゝ云ふ文句もをかしいと云へばをかしい。雪の話をしてゐたところへ急に霜が出て來て、その後の夢とは何の事やら常識では一寸分らぬ。併し霜に氷つた心持が段々と解けて、夢の如く浮き立つて來たと云ふ意であらう。かくて「月いと明うさし入りて、」と云ふのは、部屋の中へではなく源氏の心の中へ光明が、樂しさがさし入つたので、かくて心の「奥までくまな」くなつたのであらう。

（四）同じ文中で「（源氏は）良淸に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ」とあるは、文法修辭上、「主格の統一偶整を欲いた一種の非法破格」だと云つてゐられるが、併しもし、良

清は源氏に命ぜられて歌をうたひ、大輔は自發的に横笛を吹いたのであつたならば、かう書いても差支へないのでなからうか。少くとも博士のやうに正すわけには行かなくなる。

（五） 明石入道が詞の中に桐壺の帝が更衣を殊寵された事を寫して「國王すぐれて、時めかし給ふこと並びなかりける――」とあるは、「形容詞の拙い無用な重用で『すぐれて』といへば『並びなかりける』が無用」だと評してゐられるが、「國王（の御心持、御機嫌）すぐれて、（更衣を）時めかし給ふこと（他と）並びなかりける」と解した方がよいのでなからうか。かく解すれば重用ではなくなる。

「諸名家の古典批評」のやうに何等「具體的根據の明示」なしに、たゞ「手放しに褒めてゐる」だけでは仕方がない。その意味で私は、博士が「合理的批評を加へ」られたことは、國文學研究史上の一大進歩であると思ふ。唯、その合理主義が意識心理的合理主義であつては文藝に對してはいさゝか見當違ひの批評になるのではなからうか。無意識心理的合理主義でなければならないのではなからうかと思ふのである。博士の合理的批評のメスのすき間から、お蔭で私は隱れてゐた眞珠の光を瞥見することが出來た。その意味で、我々は博士に感謝しなければ

ならない。

その他、社會學的興味、教育學的、文明史的、犯罪學的、傳說學的などの興味に就いては、拙著『精神分析雜稿』に幾多の實例を擧げておいたから、こゝには繰返さない。たゞこゝに一言附加しておきたいことは自他教育上の斯學の絕大な効果である。自己教育、卽ち修養法として斯學がその人の性格容貌を一變せしめ、明朗自由ならしめる事は驚くべきものがある。また兒童教育に於いては斯學を學んで後始めて人々は兒童を取扱ふ資格が出來るのだと云ふ事を特に私は强調しておかねばならない。

第四章　超心理學としての精神分析

本書の始めに云つた通り、總て科學は一定の對象を一定の方法に依つて取扱ひ、そこに因果關係を發見せんとするものである。で、精神分析の對象たる無意識心理を如何に取扱ふかと云ふ方法に就いては大要右に述べて來たところで明かになつたと思ふが、では、その對象たる無意識心理を如何にして認識するかと云ふことを、次に我々は問題にしなければならない。一定の對象を認識するには、その對象に適した見方を定めてかゝらねばならない。精神分析の無意識心理に對する見方としては三つがある。それは(一)動的見地と、(二)局所的見地と、(三)經濟的見地とである。これ等三つの見方を總稱して、超心理學 Metapsychologie とフロイドは名付けてゐる。が、これ等三つの關係を綜合的に闡明することはまだフロイドにも成功してゐないと告白してゐる。で、次にこれ等三つの各々に就いて大要の説明を下して見よう。

（Ⅰ） 動的見地 Dynamische Auffassung

従來の心理學では精神は一定の裝置を保つて靜的に存在し、外部から感覺の刺戟を受け、內部から本能の衝動を受けることに依つて活動するものと假定されてあつた。ところが精神分析では、心理裝置が外部よりの感覺刺戟と內部からの本能衝動とを俟つことは固よりであるが、それ等が假りにないとしても、心理裝置それ自身が靜的でなく動的に活動し得るものであると假定するのである。

例へば前にも云つた通り、検閲と云つたやうな作用がある。これは內外の刺戟や衝動を俟たずしてそれ自身で活動するもので、無意識內にあるものが前意識又は意識界に出ようとするのを抑壓する作用を果す。この検閲の作用は、實は更にもつと微妙で深い働きをなすもので、意識がまだ問題にならぬ以前に於いて既に作用するとフロイドは論ずる。フロイドはこれを「初步抑壓」,,Urverdraengung“と名付けてゐる。さきに一寸言及した「初步過程」,,Primaer-

vorgang" と云ふのはこれに相當する。要するに、何か氣に入らぬ思想が無意識に存すると、なるべくそれにエネルギーを纏綿させないやうにとする心理過程である。そのためには、その氣に入らぬ思想以外の事になるべくエネルギーを纏綿させようと努力するのである。それが、「初步抑壓」である。これが、前意識だの意識だのとの交涉が起きる以前の過程である。意識だの前意識だのと交涉が起きてからの抑壓は、初步抑壓と對比した場合には「本來的抑壓」Eigentliche Verdraengung 又は「後抑壓」Nachdraengen と名付けてゐる。初步抑壓と非常に形式の似た本來的抑壓の實例としては、「顧て他を云ふ」などゝ云ふ言葉によくあらはれてゐる。何か他人から急所に觸れることを云ひ出されると、なるべくそれにエネルギーを纏綿することを避けようとする。エネルギーを纏綿させると不快が增進するからである。で、他の事にそのエネルギーを纏綿させようとするのである。このやうに反對の方面にエネルギーを纏綿させることを、フロイドは「反對纏綿」Gegenbesetzung と名付けてゐる。また、かの豐太閤が朝鮮征伐を企てたのは、その愛子鶴丸が死んでその悲嘆をまぎらせるためであつたと論ずる歷史家がある。この見解の歷史的眞僞は姑く別問題として、かう云ふ心理過程が人間に存す

ることだけは事實である。つまり、エネルギーが鶴丸の死と云ふ事實に纒綿することは太閤にとつて不快であるから、朝鮮征伐と云ふ別の事實にその扱ひに困つたエネルギーを纒綿させようと云ふ心理的仕組みである。これは一種の半ば意識的な抑壓である。かう云ふ過程が無意識内にその最も初歩的な形で存することが、分析の結果知られると云ふのである。

右は主として「檢閲」と「抑壓」とに就いて動的見地を說明したのであるが、その他になほ、超自我（理想我）Ueber-ich（Ideal-ich）の自我に對する關係などに就いて、これが證明せられるのであるが、それは後節に讓る。

（II） 局所的見地 Topische Auffassung

一體、我々の心理には空間的關係と云ふものはない筈である。我々がビルディングの六階に登つたから思想が高まつたと云ふわけもないし、地下室に這入つたから心理が深くなつたと云ふわけもない。と同時に、前方に走つたから思想は進歩したと云ふわけもない。また身體の靜

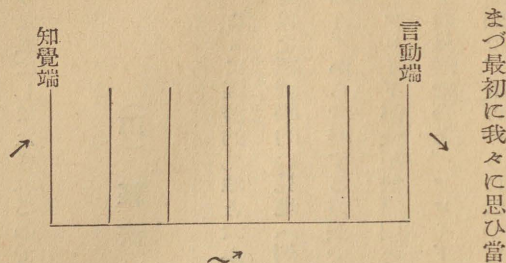
止してゐる時でも、我々の心の働きには深さとか廣さとか上層とか下層とか云ふものは實質上あるわけはないのである。併し、我々は假にあるものとして考へる方が心理現象を考究するに都合のいゝ場合には、それが假定であると承知してやつてゐる限りは差支へないのである。

ところで、精神分析からする無意識への見解にも、この假定的見地が許されるのである。これを局所的見地と名付ける。即ち、大體に於いて意識と前意識と無意識の三界から我々の心理は成立つと想定するのである。意識とは、我々の日常生活に於いて我々の行動を不斷に、表面的に支配し規定してゐるところの心理的主體であり、前意識とは、現在は忘れられた如くになつてはゐるが、呼出さうと思へばいつでも意識界へ呼出すことの出來る部分の心理である。現役と豫備との如きものである。ところで無意識はそれ等の底に深く潜んでゐて、意識はその存在すら知らないが、實は常に意識を支配し操つてゐる力強い心理的原動體のある場所である。さうしてこの前意識又は意識と無意識との中間に檢閲が存在して、無意識界から意識界(又は前意識界)に出沒せんとする怪しいもの(現實生活に不適當な思想)を一々誰何するのである。

フロイドはまた、その『夢の解釋』の中で、次のやうな局所的見地に就いても論じてゐる。

我々は心理的活動に資する道具を、複合的の顯微鏡、寫眞機、その他これに類した裝置に眞似て考へて見たいと思ふ。精神の位置は、して見れば、さう云つた裝置の內部の一ケ所に相當するわけだ。そこで影像の前階の一つが生れて來る個所に相當するわけだ。このやうな比較は、精神活動をとり壞し、それの個々の活動を裝置の個々の合成部分に歸することに依つて、複雜なる精神活動を明かにしようとの我々の試を助ける限りに於いて考案せられたものである。我々が冷靜な判斷を失はず、足場を本建築と取違へない限りは、我々の假定を自由に振舞はせてよからうと思ふ。我々は未知の題目を始めて取扱ふには、なるべく判然と掴み易い假定が何よりも大いに結構であると思ふ。

それ故に我々は精神裝置を一つの合成的道具であると考へる。その合成部分を我々は、個所 Instanzen または區劃 Systeme と呼ばうと思ふ。さうして見ると、これ等の區劃が相互に連續的の空間的關係を保持することは、宛も望遠鏡のレンズの各區が一つ一つ並んでゐるのと同樣であらうとの期待を我々は持つのである。嚴密に云ふならば、精神區劃が實際、空間的に配列されてゐるやうに假定する必要はないのである。たゞ或る精神上の現象に於いては亢奮が一

定の時間的秩序を追うてその區劃を通過する事實に依つて、もし確實な連續が樹立されるならば、それで我々としては澤山なのである。この連續は他の現象に於いてはまだ變化するかも知れないのだから、それだけの用意はしておきたいと思ふ。

まづ最初に我々に思ひ當ることは區劃に合成されてゐる裝置は一つの方向を持つてゐると云ふことである。總ての我等の精神活動は、內的又は外的の刺戟から起つて神經的思想作用に終るものである。そこで我々はこの裝置には感覺的の端、並びに言動的の端があるとするのである。感覺的の端には知覺を受容れる區劃があり、言動的の端には言動の口を開く區劃がある。精神現象は大抵は知覺端から言動端へと進んで行くものである。であるから、精神裝置の最も普通の形をこゝに示した圖のやうに表はすことが出來る。

これはほんの一例であるが、局所的の見方は大體以上のや

うな風にしてなされるのである。

（III）經濟的見地 Oekonomische Auffassung

こゝに經濟的見地と云ふのは對象（無意識心理の過程）を量的なものと見なし、その量的な對象を經濟學的の見地（例へば最少の勞力を以て最大の快樂を獲得せんとするものとして見る如き）から考察する方法である。

フロイドが快不快原則と云ひ、リビドー說と云ふが如き諸理論は、この經濟的見地に基づいての見解である。フロイドは『快不快原則を超えて』„Jenseits des Lustprinzips"（1920）の卷頭で、次のやうに云つてゐる。

「吾人は精神分析學に於いて、精神過程は所謂快不快原則によつて自働的に統制されるものであると云ふ事を當然として認容する。卽ち精神過程が緊張した場合には何時でもそこに一定の傾向が生じその結果この緊張がなくなり、かくて不快が避けられて快感が獲られるやうにな

ると、かう我々は信じてゐるのである。かう云ふ作用を考慮に入れつゝ、我々が今まで研究して來た心理程過を考察して見ると、我々は經濟的見地なるものを我々の研究の內に取入れるやうになるのである。と云ふのは、局所的見地並びに動的見地以外に經濟的見地をも參酌して一定の過程を說くと云ふことは、今日我々が考へ得る最も完全な說き方で、これを超心理學的な說き方と名付けることが至當であらうと思ふ。」と。

またフロイドは『集團心理と自我の分析』„Massenpsychologie und Ich-Analyse"(1921)の中でリビドーなるものを說明して次のやうに云つてゐる言葉の中にも、經濟的見地の大體如何なるものであるかゞ窺はれる。

「リビドーは感情の學說からとつた語である。我々は『愛』といふ言葉に包含され得る總てのものと關係ある諸本能のエネルギー(これは現在に於いては實際に量ることは出來ないが、量的なものと見なしておく)を、リビドーと云ふ名稱で呼ぶのである。」

フロイドの經濟的見地を一層明かにするために、一つの實例に就いて說いて見よう。彼は『機智とその無意識に對する關係と』„Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten"

(1907）の中で、機智（キッツ）と滑稽（コミック）と諧謔（フモール）との差違を、この經濟的見地から論じてゐる。即ち、機智の快感は禁制支出を節約するところから生じ、滑稽は觀念（纒綿）支出を節約するところから生ずると云ふのである。各々に就いて、多少の說明を加へて見よう。

　機智の快感は禁制支出を節約するところから生ずると云ふのは、如何なる意味かと云ふに、例へば（これはフロイドの右の書中に出てゐる實例であるが）こゝによろしからぬ方法に依つて成金になつた二人の男があつて、彼等は或る肖像畫家に賴んで自分等の肖像畫を描かせた。畫が出來上つたので、一夕彼等は或る美術批評家を招いてその畫の批評を乞うた。批評家は暫く二板の肖像畫を眺めてゐたが、ツカ〳〵と畫の前に近付いて行つて指先を以て兩圖の中間をさし示しつゝ「キリストが居ない」と口ずさんだ。これは實に美事な機智である。批評家はかう云ひたかつたのである。これは二人の盜賊の畫だ。盜賊二人並んでさらし者になつてゐるならば、嘗てはキリストが眞中に死刑に處せられたのだが、今日の場合にはそれがないと。かう彼は云ひたかつたのだが、この思想を露骨に表現することは彼に於いて「禁制」を受けた。禁制を實施するためには彼に於いて相當多量のエネルギーを支出したのである。ところがこの禁

制をすりぬけて腹にたまつてゐる思想をしてすり抜け出でしめる機智が働いたので禁制の必要のために支出されたエネルギーはそれだけ節約されたわけである。その節約されたるエネルギーが發して笑ひとなる。それが機智の快感である。

次に、滑稽の快感は觀念支出を節約するところから生ずると云ふのは如何なる意味か。例へば(これは著者の實際に聽いた話であるが)、こゝに一人の少女があるとする。その少女は生れて以來自分の實父を見たことがない。或る日偶然の機會に依つて、久しく會ひたく思つてゐたその父に會へることになつた。彼女は所定の時間に行かうとしたが、電車の都合で半時間ばかり遲れた。ところが父は急用で出發すべき時間が定まつてゐたと云ふので、彼女の來るのを待たずに、土産に持つて來た果物の籠一つを殘して去つてしまつた。彼女はその籠を見た時に、急にをかしくなつて笑ひ出してしまつた。何故、彼女は父に會へなかつたことを悲しく思ひつゝも、このやうに笑ふ氣になつたか。これ觀念支出の節約のためである。頭に描いてゐる父と云ふ觀念のため假りに90の支出をしてゐたとすると、實際會つた果物の籠の觀念のためには10の支出しかする必要がない。そこで差引80の支出が殘る。これは笑ひとなつて散財せられ

る。それが滑稽の快感である。觀念の支出と云ふ意味が讀者諸氏にまでよく呑込めないかも知れないが、それはかう說明せられる。生理學が敎へる通り、觀念する間にも神經作用は筋肉に流れ去り、觀念を伴うてゐる神經作用の支出は觀念の量的要素の支出にも利用せられる。大きい動作が觀念せられる場合には小さな動作が觀念せられる場合よりも支出が大きい。つまり、より大きな動作の觀念はより大きな神經作用支出に伴はれてゐるわけである。これを「觀念の身振的表情」と云ふのである。例へば、人格の小さい人間と云ふ觀念を表はす場合には、我々の身振表情も豆粒のやうな形をして見せると云ふ次第である。

次に、諧謔はさまぐな感情の支出を節約するところから生ずると云ふのであるが、これはどう云ふ意味かと云ふに、マーク・トヱン Mark Twain がその自傳的物語の中で述べてゐるやうな話に於いて說明することが出來る。彼は或る個所で自分の系圖のことを述べ、それがコロンブスの仲間の一人から來てゐると云つてゐる。ところで、祖先の話だと云ふので、讀者は始めの程は敬虔な氣持になつてゐると、その祖先と云ふのは、その性格が段々描寫されて行つて見ると、その鞄の中には幾つかの洗濯物がつまつてをり、而もそれ等の洗濯物の紋樣がみん

なそれぐ〵違ふと云ふので、折角敬虔の念が節せられて、我々は笑ひ出さゞるを得ないやうになるのである。

マーク・トヱンの今一つの話は、彼の兄弟が地下室を造り、その中へ寢臺、机、ランプなどを持込み、屋根としては眞中に孔のある大きな帆布を張つたが、夜になつて室が出來上つたところへ家の方へ歸る牛が屋根の孔から机の上へ墜落しランプを消して了つた。兄弟は手を貸してこの牛を外へ押出し、部屋の工合を元のやうにした。ところがまたその翌日も同じやうな騷ぎが起つて同じやうな事を繰返し、その次の晩もその次の晩もさう云ふ風であつた。そのやうな話はその繰返しに依つて滑稽になるのである。ところがマーク・トヱンは最後にかう述べてゐる。その兄弟は遂に四十六番目の晩にやはり牛が陷込んだ時に云つた。――これは少々單調になり出したなアと。それを聽いて我々は諧謔的快感を禁じ得ないのである。何となれば、我々は既に久しい以前からこの兄弟が如何にこの幾度もの厄介に焦立つてゐるのであらうかを期待してゐたからだ。我々は生活の内に作り出してゐる小さな諧謔は、大抵焦立しく怒る代りに、それの支出を以て作上げてゐるのだ。

このやうにフロイドは、諧謔を神經作用の支出の經濟的見地から說明してゐるのであるが、更にこの諧謔を動的見地からも說明し得ることを實際に示してゐる。それをこゝに紹介して、この超心理學に關する章を終ることにする。

或る人が諧謔的見地を自分自身に差向けてかくて自分の苦惱の可能性を防ぐところの、さう云ふ立場である。或る人が自分を子供のやうに取扱ひ、同時にその子供に對して優越なる成人の役割を演ずると云ふのは、意味のあることであると思ふ。我々が自我の構造に就いて病理學的に硏究したところのものを考合せて見るに、このあまり尤らしくも見えない考へ方に大いに支持を與へざるを得ないのである。自我なるものは單純でなく、その核心として一つの特殊な審判機能たる超自我を包含してゐる。この超自我と自我とは、多くの場合、合流し並流してゐて兩者の區別が我々には立たないほどであるが、而も他の方面の關係に於いては兩者は截然區別されるのである。超自我は發生的には兩親的審判機能の遺產である。超自我は自我を屢々嚴格なる屈從に强ひ、嘗て少年時代に兩親——又は父親——が子供を扱つたのと實際に於いて同じやうに自我を扱ふのである。このやうに、もし諧謔家自身が心的重點を自我から超自我に移

してゐるところに諧謔が生ずるのだと考へるならば、それこそは諧謔の動的説明である。このやうにして膨れ上つた超自我にとつては今や自我は非常に小さなものに見えて來る。自我の興味は總て些末なものとなる。さうして、このやうにエネルギーを分割した曉には、自我の反動力を抑制することは超自我にとつては容易になるのである。

第五章　精神分析の發達

（1）シャルコー及びジャネー

心理學的な原理並びに法則に依つて心理的疾病の問題を闡明しようとする科學たる精神病理學の發達したのは比較的近頃の事で、十九世紀末葉に至るまでは存在しなかつたと云つて過言ではないのである。これに先立つこと百年ほどの頃にメスマー F. A. Mesmer（1733—1815）その他「動物磁氣」を論ずる者等の實施して見せた著しい現象のために世人は非常にこの方面に興味を寄せたが、その後の研究に依つてこれ等の現象は磁氣のためではなく、術者の及ぼす暗示のためであることが、明かになつた。そのやうな「暗示」,,Suggestions" は明かに心理的原因から來るもので、心理的原因のために心身兩方に影響の及ぶものであることが明かになつた。併し、フランスの學者シャルコー Charcot（1825—93）の時代に至るまでは、この考

へ方を疾病の問題に適用することを敢へてする者がなかつた。で、ある種の疾病は單に「觀念」"ideas"の仕業であることを斷定したのは、實にこのシャルコーであつたのだ。この斷定こそは近世の精神病理學の礎石であると云ふことが出來る。かくてこの方面の研究は進んで、所謂『機能的神經障害』(ヒステリー、神經衰弱、並びにこれ等と關係ある狀態)に關する我々の知識と理解とは急速な進展を示したのである。やがてヒステリー、神經衰弱などに於いてはその原因の大部分が種々の心理的要素にあることが判明したので、それ等の要素を確定的な言葉に定義する試みがなされた。ところでその問題の心理的要素の内にあつて一つの重要な位置を占めるものは明かに「暗示」である。つまり、患者の心に或る種の觀念と信念とを植付け、その結果、種々なる徵候(狀症)や障害が生ずるやうになるのである。併しながら暗示なるものは甚だ漠とした、一般的な過程であつて、錯綜せる疾病狀態を眞に十分に說明することは出來なかつたのである。そこで學者たちはなほ研究を進めて、これ等疾病の發生及び性質をもつとよく說明し、また如何にして暗示がそのやうな結果を示すかを說明する底の心理的法則を發見せんと力めたのである。

この方面に於いて注意すべき業績を擧げた者は同じく、フランスの心理學者ジャネー P.Janet (1859—) である。彼の功績は意識の「分裂」"dissociation" と云ふ概念を導入したことに存する。この概念は十九世紀末葉に於いて、ジャネーが幾多の實驗の結果發展させたもので、これこそは精神病理學の發達過程に於ける根本的里標となつたものである。ジャネーに依れば、意識は必ずしも單一な、同一起源の流れから成るものではなく、時としては數個の多少とも獨立した流れに分裂してゐるものであつて、このやうな分裂を想定することに依つて幾多の現象を（ヒステリーやその他の疾病障害に於ける現象のみならず、我々の日常生活に於ける諸々の過程をも）說明することが出來る。この概念はさまぐな現象を理解する上に非常に有力な武器であるが、併し或る程度のところまで我々を導いて行くだけであつて、更にそれ以上の問題が當然我々の間に起つて來るのであるが、それ等の問題に對しては意識分裂の概念だけでは何とも致し樣がないのである。さう云ふ問題は、心の自働性に就いて知るところがあつて始めて我々はこれに答へることが出來るのである。つまり心的過程のさまぐな現象を生ずる力や、それ等の現象の生ずる法則を知ることに依つてのみ、答へることが出來るのである。

(II) フロイドの史的地位及び特徴

心の自働性、即ち動的見地に入らんとの始めての統一的な試みをなしたものはフロイドであつて、彼は何としても近世の精神病理學に於ける大立物たることは何人も否認し得ない。よしんばその學說全般は將來に於いて如何なる改訂を受けるかは今のところ豫斷は許されないにもせよ——。前にも云つた通り、フロイドの精神分析學は一九〇〇年に『夢の解釋』が公刊せられた時に、その發祥を告げたものとされてゐるが、それ以來、彼の學說にも幾多の進展はあつた。さうして今日では欝然たる一大體系の心理學となつて成長してゐるのである。

一八八〇年にヰインの醫師ブロイヤー J. Breuer がアンナ Anna と呼ぶヒステリー患者を取扱つたが、この患者に就いて症狀は患者自身も意識してゐない過去の記憶から生じてゐることと、さうしてその記憶を今一度意識面に引張り出して來ることに依つて病氣が癒るといふことを發見したのである。フロイドはブロイヤーと仕事を共にしてゐたが、この患者の場合の暗示

する事實に特に注意を怠らず、この方面からして漸次に、併し不斷に、研究を進めて行つて、今日彼の名に於いて榮えてゐる精神分析と云ふ理論と技法とを樹立するに至つたのである。精神分析とは患者アンナの發見の如きものとフロイドは常に云ひ慣はしてゐる。

併し、こゝに注意すべきは、根本的原理の或るものは殆ど始めから、彼以前に既に、發見されてゐたと云ふことである。これ等の原理の第一は、心には意識以外の何物かゞ存在してゐること。卽ち、記憶なるものが存在してゐて、それが意識には殆ど近付き得ないやうになつてはゐるにしても、なほその存在を保ち、且つ不斷に影響を及ぼしてゐるものであること。心はそれ故に、單に意識的過程から成立つてゐるのみでなく、また無意識的過程からも成立つてゐるわけである。原理の第二は、意識から閉出されてゐる記憶は、意識界に出現することを能働的に妨げられてゐる何等かの力に從屬してゐるに相違ない。何となれば、それ等の記憶は如何なる普通の方法を以てしても呼出すことは不可能だからである。この能働的な力をば「抑壓」と名付けてゐるのであるが、抑々これ等の記憶が意識界に入り來ることを拒んだ力そのものが、始めにこれ等の記憶をこのやうに忘却せしめたものに違ひないとの推論は尤なことに思はれる。

次になすべきことは、「抑壓」と云ふ術語を以て呼ばれてゐるこの拒否の事實が如何にして生じたか、また何故に生じたかを決定することでなければならない。研究の結果、フロイドはかう結論せざるを得なかつた。心の中に同時に二つの相容れざる勢力が存在し、その相排擠する緊張を避けむとして心はその一方を意識から排除するために抑壓は生じたのである。この抑壓された方の力が無意識界に殘つて、そこでなほ活動を續けてゐるが、直接的には意識界に浮び上ることは許されないのである。それ等の機制に就いては、本書中でも既に相當詳しく論述して來たつもりである。

フロイドの思想もその起源以來相當の發展を示してゐるが、それにはフロイド自身の研究もさることながら、その門弟、論敵等の研究に負ふところも少くない。現在ではユング Jung 並びにアードラー Adler と共に三派あるものとして認められてゐるが、固よりフロイド派が正統派(オルソドクス)と一般に見做されてゐる。

フロイド派の特徴としては、(一)無意識の自動性、(二)エディポス・コムプレクス、(三)リビドー說、(四)抑壓說、(五)生死本能說、の五者(五九頁參照)が擧げられ、なほフロイド說が

汎性慾說であると誣ひられることに就いて、フロイドのために少しく辯明しておきたい。

一、精神分析は何でもかんでもあつちへ持つて行くと云ふが、その「何でもかんでも」とは正確に云へば何であるのか。精神分析學は科學であり、科學は各々その一定の對象を限定するものであるから（精神分析學は無意識心理現象以外に對しては何等發言權を主張するものでないから）その「何でもかんでも」とは、難者に於いて果して無意識心理現象の範圍內に於いてと云ふ自覺があるならば、フロイドは敢へてその批難を全部的に拒けないかも知れないが。實際、精神分析學は多くの事（無意識心理現象である限り）を性的根源から說明せんとはする。併し、その性の意味は、普通の性の意味（性殖）よりは遙かに廣く、プラトーンの所謂エロスと云ふほどの意味であることを承知せられねばならない。

二、何でもかんでもあつちへ持つて行くと云ふやうな批難は、第一にそれが感情論であると云ふことを自覺して貰はねばならない。何でもかんでもあつちから來てゐると考へることは、不愉快であると云ふ感情論は、それはそれ自身として一種の美的價値はあるかも知れないが、科學は美的價値には絕對に關係のないことであるし、關係させてはならないことだ。科學はあ

くまでも知的の行動である。もし實際に何でもかでもが、あつちから來てゐたらどうするのだ。好むと好まざるとを問はず、それが事實あつちから來てゐたらどうするのだ。仕方がないではないか。あつちから來てゐると認めざるを得ない場合にあつちから來てゐると明言することは、（如何に俗衆の感情に逆ふ結果にならうと）も科學者の良心であり勇氣ではないか。

三、リビドーの概念には、性的意味が强い。抽象的な、哲學的觀念ではない。それは精神分析學が哲學ではなく、科學である以上、當然である。愛と云ふやうな觀念的な、形而上的な考へ方はとらないで、性と云ふ形而下的な、唯物的な、考へ方をとるのは當然である。それに、學は何れの學でも、科學でも哲學でも、可能な限りに於い一定の原則に照して種々の現象を說明せんとする。これは當然である。一定の原則に照して可能な限り廣範圍の諸現象を說明せんとの努力（卽ち學問）を好まないと云ふなら、その人は抑々學問には緣のない人である。そんな人は此方も相手にする興味がないし、その人も學問などに口出しはせぬ方が悧巧であらう。

因みにジグムント・フロイド（Sigm. Freud）は一八五六年（わが安政三年）五月六日、メーレンのフライベルグ（今日のチェコスロヴキア領內）に生れたユダヤ人であつて、四歲の頃

ギインに來つて大抵の學校を濟ませ、その後フランスに學んだが、一八八六年以降、神經病醫としてギインに居を定めた。一九三五年に於いて、西洋流に數へて七十九歳である。精しくは、『自傳』(拙譯『精神分析總論』の內)に依られたし。

(III) ユング、アードラー、その他

フロイドとユングとアードラーとは現今精神分析學界の三派を代表するものとされてゐるが、元來ユングもアードラーもフロイドの高弟であつた。一九〇九年にフロイドがアメリカから招かれてそこに赴いた時には、ユングは副將としてフロイドに同道した。その時ユングの講演題目は『病兆的聯想研究』、及び『幼兒心理の葛藤』であつた。一九一二年にまたフォルダム大學の新設醫科の夏期講習會のために赴いて講演した。

フロイドとアードラーとは共にオーストリのギインに在住してゐるが、ユングはスヰツルのチウリヒに在住してゐるので、ユングとその同僚ブロイラー Bleuler のことをまたチウリヒ

派とも呼ぶのである。フロイド派は汎性慾說（この稱呼は確に誤解ではあるが）と呼ばれ、アードラー派は優越慾說と呼ばれ、ユングは哲學的無意識說と呼ばれてもよいであらう。ユングは相當獨創的な見解を有する學者あつて、漸次にフロイドと細々した點で別意見を抱やうになり、一九一四年にフロイドを盟主とする國際精神分析學會から脫退することになつた。ユングの著書としては、『無意識の心理學』、『早發性痴呆症の心理』、『心理的型』、『リビドーの變化と象徵』、『分析心理學と敎育』、『精神病の內容』、『分析心理學二論文』、『言葉の聯想の研究』その他澤山にある。

ユングの大きな功績の一つは集合的無意識を發見したことであらう。集合的無意識のことをフロイドの方ではエス es と名付けてゐるが、或はユングの示唆に負ふところがあるかも知れない。但しこの語を始めて用ゐたのはグロデック (Groddeck) である。es とは英語の it, ラテン語の id に相當する。卽ち「それ」である。Es scheint mir ....「何々のやうな氣がする。」自分の意識には判然分らないのであるが、併し自分の內なる何者かの確乎たる判斷である。この判斷の主體がエスであり、集合的無意識である。日本人の所謂「蟲が好かぬ」の蟲は

個人無意識であるかも知れぬが、それの集合的なものであらう。フロイドは局所的には從前は意識、前意識、無意識の三者に區別してゐたが、エスの論を發表して以來、また動的に自我とエスとを想定するやうになつた。ユングの學說からすれば、心理には意識と個人無意識と集合無意識とがある。

アードラーの優越慾說と云ふのは、ニイチェの權力意志說と同樣な考へ方であつて、「無意識哲學」を唱へたショウペンハウエルの思想系統を引くニイチェが無意識心理關係者のアードラーやランクに影響を與へてゐるのは興味あることである。尤も、ショウペンハウエルの無意識と云ふは精神分析のそれとは全然異つた內容のものではあるが――。アードラーの說では我々が人々と己れを比較して「上(オーベン)」か「下(ウンテン)」かを考へ、下であることを認めざるを得ない場合に「劣等感」が生じて、そこから神經病が起つて來るとする。ユングの學を「分析心理學」(Analytische Psychologie)と云ひ、アードラーの學を「個人心理學」(Individualpsychologie)と呼ぶのである。共に哲學化してゐる(フロイドのが純粹に科學であるに對し)點に於いて共通であるが、兩者はそれ〴〵またその特徵を異にしてゐる。フロイドのは無意識心理學

であるから、自我（意識）の働きに就いてはあまり細かくは論じないが、アードラーのは哲學化したる自我心理學であるから、その方面に於いて價値あることはフロイドもこれを認めてゐる。併しアードラーの立場に於いては無意識と抑壓說とは放棄せられたから既に完全に精神分析ではなくなつてゐる。これに反し、ユングのは同じく哲學的ではあるが、觀念的であつて、その無意識內容の觀念（集合無意識）に哲學的考察を加へたものであると云ふことが出來る。汎性慾說としての批難を回避せんとの努力がこの轉向となつて現れたものであると云ふ分析的批評を、フロイドはユング說に對して加へてゐたことを著者は記憶してゐる。兩家への批評はフロイドの著『精神分析運動史』の中に精しい。

その他、特色ある精神分析學者としてはランク Otto Rank, フェレンチ Ferenczi, ステーケル Stekel, アーブラハム Abraham, フリウゲル Flügel, クライン女史 Frau Klein, アンナ・フロイド等がある。

ランクは非常に獨創的な、やゝ瞑想的傾向を有する學者で、フロイドが愛重おかざる門弟である。著書としては『出產の外傷』、『英雄誕生の神話』などがある。『出產の外傷』說に依つ

てフロイドのエディポス・コムプレクス說を覆さんと試みたほどであるが、フロイドはなかなか承服しないやうである。

フェレンチはブダペストの人で治療上の能働法 Aktive Methode を以て有名である。精神分析は所謂アブレアクチオン Abreaktion 即ち「發散」の方法を以て患者自身をしてコムプレクスを去らしめる消極的方法をとるのが常となり、催眠術的暗示を與へることを忌むのであるが、フェレンチは種々な積極的、能働的の態度(俗に云へば、おどしたりすかしたり、自己引下げにより相手を誘つたり)をとるのであるフェレンチは生物學と精神分析學との交渉點に特別の興味を持ち、卽ち所謂「生物分析」の始祖と云はれ得べき天分豐かなる學者である。

フリウゲルは家族の心理的研究者として知られ、クライン女史は小兒分析の研究に於いて獨創的領域を開拓してゐる。女史は幼兒時代に分析を施しておけば世に狂人はなくなると豪語してゐる。幼兒の分析法は大人のと違つて、子供をして玩具を持遊ばしめ、その間に自ら彼等のコムプレクスを觀破し、それに適當なる處置を講ずるのである。女史はフェレンチの門下であるが、只今は英國にゐる。

女流の兒童分析者としては、またフロイドの娘アンナ・フロイドがある。『兒童分析概論』その他の著書がある。

ステーケルも有名な學者で、その著者の多いことはフロイド以上であらう。その行文の讀み易いせいか、その分析のいさゝか單純ではあるが、明快なせいか、我が國の醫師間にはフロイドよりも寧ろステーケルの方が流布されてゐるほどである。その『夢の言葉』"Die Sprache des Traumes" (2 Aufl. 1921) は名著の呼聲高く、フロイドも屢々その著書中に參照言及してゐる。

(VI) 國際學會と研究機關

右にも云つた通り、斯學界の現狀は大體三派鼎立の形になつてゐるが、やはり中堅的勢力のあるのはフロイド派であらう。

さきにも一寸云つた通り國際精神分析學會はフロイドを盟主として一九一〇年に創立せられ

たもので、英國の支部は一九一三年に成立し、今では十ケ國に支部を有してゐる。學會所屬の研究所はギイン、ベルリン、ロンドンの三ケ所にあり、それぐ直屬の療養所（サナトリウム）を備へてゐる。學會の「規定」を見ると、その「第三條、目的」の條下にかうある。

「本會の目的はジグムント・フロイドに依つて創始せられたる精神分析學を純粹の精神分析學としてのみならず、また醫學及び精神科學に對する理論及び實踐的應用としても發達せしめるにあり。會員は精神分析上の知識の獲得及び傳播のためのあらゆる努力に於いて相互に支持すべきものとす。」

「以上の目的を達成せむためには、精神分析學の研究所、教習所、（患者の取扱所、治療所、自宅治療、その他あらゆる種類の科學的施設と經營とをなす。」

學界の機關たる『國際精神分析學雜誌』は一九二〇年に創刊せられ、現在英獨佛三ケ國語で三種のものが公刊されてゐる。雜誌としてはこれの外に、各國語で獨立的なものが二三種づゝ出てゐる。ドイツ文でのものを總て左に擧げて見る。

一、『國際精神分析學雜誌』,,Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse,“ 創刊以來一

九三五年に於いて廿年。フロイド自身監修及び編輯。

二、『イマゴー』,,Imago" 自然科學及び精神科學の方面に於ける應用精神分析のための雜誌と斷つてある。これも右と同年の創刊である。フロイドの監修及び編輯。

三、『精神分析運動』,,Die Psychoanalytische Bewegung" 創刊以來四年目の一九三三年に於いて廢刊となつた。ストルファー A. J. Storfer の編輯。

四、『精神分析教育雜誌』,,Zeitschrift für Psychoanalytische Pädagogik" 創刊以來一九三五年で八年。メング H. Meng 博士及びシュナイダー博士 Dr. E Schneider の編輯。

五、『精神分析中央雜誌』,,Zentralblatt für Psychoanalyse" これは一九一一年に創刊され、各國それぞれの委員があつて國際的なものであつた。英米國の委員には Putnam, Jones 並びに Brill などが當つてゐる。只今はないやうであるから、これが『國際精神分析學雜誌』の前身である。

六、『精神分析年鑑』,,Almanach der Psychoanalyse" 毎年頭に前年度の代表的論文を輯めて一本となす。

なほ、アメリカで出てゐるものとしては——

一、『精神分析評論』"Psychoanalytic Review"(一九一一年創刊)がある。編輯者は Dr. White and Jelliffe, 年四回發行。

二、『神經病及び精神病雜誌』"Journal; of Nervous and Mental Disease," 編輯委員は Dr. Smith Ely and Jelliffe, 年二回發行。

三、『精神分析季報』"Psychoanalytic Quarterly" 編輯者はニウヨオクの Dr. Dorian Feigenbaum, 他三名。その他に叢書類が二三ある。

第三次の國際精神分析學會長はドイツの支部長アイティンゴン博士 Dr. Eitingon が兼任してゐるが、第二次會長は英國ロンドンの支部長アーネスト・ジンーズ博士 Dr. E. Jones であつた。第一次會長はブダペストのフェレンチ博士 Dr. Ferenczi であつた。

昭和二年頃、日本へ來た精神分析映畫『心の不思議』の製作に當つたのはハンス・ザクス博士 Dr Hans Sachs であつたと記憶してゐる。この學者はドイツ支部の書記長を勤めてゐる人である。この映畫は『カリガリ博士』以來、わが國に馴染の深いヱルネル・クラウス主演の

物凄い映畫であつたさうだ。著者は遺憾ながら一覽の機會を逸した。併しあの映畫に現れてゐる分析法は今日では既に陳くなつてゐると云ふことである。

精神分析學者とは自稱はしないが、斷えず同情を以て斯學の發展に注目して來た英國の性學者ハヴロック・エリスは、一九一一年にオーストラリア醫學會への報告にかう書いてゐる。「フロイドの精神分析法は、今やオーストラリアとスヰツルとに於いてばかりでなく、英國、印度、カナダ、更にまたオーストラリアに於いても盛んに實施せられてゐる。」と。

一九一一年と云へばわが明治四十四年に相當するが、私の知つてゐる限りでは、日本で斯學が研究せられるやうになつたのも大體同じ頃である。日本に於ける斯學研究史に就いては、後章に言及するであらう。

英國に於ける精神分析以外の方面の學者にして精神分析に深い關心を持つた人としてはエリスの外にリヴァーズ Rivers. を數へねばならぬ。彼は本來民族俗學や醫學の方面の專攻者であるが、後、精神分析に非常に熱烈な興味を寄せ、世界大戰の時には自ら戰線に出動して多くの戰爭神經症患者を治療した。彼は數年前に物故した。

第六章　精神分析研究手引

（I）我が國に於ける研究史及び文獻

わが國に於ける精神分析又はフロイド研究の起源に就いては、著者等の編輯する雜誌『精神分析』の昭和八年七月號（第一卷第三號）に、上野陽一氏が『精神分析昔話』の題下に書いてゐられるから、その一節を紹介しよう。

「精神分析の事を最初に日本に紹介したのは心理學者である。醫家は少し遲れてゐる。まとまつた書物として公にされたのは、榊保三郎博士の『性慾研究と精神分析學』（一九一九年）を以て初めとする。

しかし精神分析初期の歴史を調べるに當り、醫家の方面において忘れてならないのは諸岡存

醫學博士である。榊博士の著書にも引用してある通り（三一二ページ）同君は『源氏物語』にフロイド式の解釋を加へた最初の人である。よつてその時分のことを明らかにしておきたいと思つて、同君に電話して知り得たことは、大體左の通りである。

同君は福岡醫大に在學中（大正三年卒業まで五年間）から精神分析の本をよんでゐた、その頃フロイドの『イマゴ』といふ雜誌も來てゐたし、ブロイラーの本も來てゐた、誰も醫家が顧みない中から讀んでゐたさうである。その頃同君が編輯發行してゐた同人雜誌に『エニグマ』といふのがあつた。久保猪之輔夫妻や、柳原アキ子や、河原治作君などが同人であつたが、その雜誌にシバ〳〵精神分析のことをかいたといふことである。榊博士の引用して居られる源氏物語の解釋なども、この雜誌に發表されたものである。『エニグマ』は大正二年の創刊で、その第一號には、諸岡君が『未婚婦人の夢』といふフロイド式の實例をかいてゐるから、醫家としての最初の輸入者は諸岡君である、といつてよからう。

しかし私は範圍を心理學の仲間に限つて、當時の有樣を話すといふ最初のテーマに戻らなければならない。

丁度一九一二年（大正元年）の一月に『心理研究』といふ雜誌が創刊された。私はこの雜誌が一九二五年（大正十四年）に『心理學研究』と改題されて、心理學會の機關雜誌となるまで約十四年間、編輯と發行との世話に當つた。發賣所は大日本圖書株式會社であつた。私は今この雜誌を中心として、日本における精神分析の初期の狀況を述べようとするのである。

この年には、精神分析に關する限り左如き論文が發表されてゐる。

題	人	月	ページ
もの忘れの心理	大槻快尊	四	四〇
やり損ひの心理	同	七	三〇
精神分析法の話	木村久一	八	六
祕密覿破法と抑壓觀念探索法	同	九	一七
やり損ひの實例	大槻快尊	十一	六

かう書いて見ると『心理研究』誌上において、最初にフロイドを紹介したのは、大正元年四月、大槻快尊君の『もの忘れの心理』であるといはねばならぬ。

大槻快尊君のこの二つの論文は、全然フロイドの說を紹介したもので、「つい」忘れたとか、

何の氣なしにしたような「やり損ひ」にも、無意識的に見て、大に意味のあることを說いたものである。當時ヴント一點バリの、意識のない狀態は認めるが、無意識といふ精神狀態などは非科學的のものとして排斥してゐた、いはゆる正統派の大學心理學とは、よほど趣きのちがつた學說が紹介されたワケである。大槻君は今は名古屋の大須觀音の住職をつとめて居られる。

木村久一君は早敎育論者として名高い人であるが、この時の論文には、精神分析といふコトバをやゝ廣い意味に解して、『ハムレット』の中に、主人公が演劇を催して叔父の惡事を探るところがあるが、これは實に初步の精神分析法であるとなし、(一)催眠法と、(二)擬眠法と、(三)水晶擬視法、(四)自働書記法と、(五)ユングの解夢法と、(六)聯想診斷法と、(七)脈搏測定法と、(八)感情の電流試驗法とあげてゐる。これを總論として、さきの論文において、各論を試みてゐるが、抑壓觀念探索法としてフロイドの說を說明し、ヒステリー性障礙が抑壓觀念に原因してゐる例を澤山擧げてゐる。ノロケは抑壓觀念釋放の一方法であつて、「我等はよくノロケる者にオゴらせるが、彼等に取つては、オゴル位は何でもないのである。」といつたやうな輕い調子で、巧みにコナしてあつた。

大槻君の「實例」は前の論文の追加である
即ち精神分析輸入の第一年はかくして暮れたのである。登場人物は大槻快尊君であつた。
第二年一九一三年(大正二年)の『心理研究』における精神分析は少しく淋しい觀がある。

題	人	月	ページ
精神療法の話	大槻快尊	一	三〇
不快の忘却	木村久一	六	一二
フロイド派の氣焔	一記者	七	二

木村君の論文は、不快なる觀念はこれを抑壓して、忘却しようとする傾向のあることをいろ〳〵の實例を以て說いたものである。これはフロイドの紹介でも何でもなく、舊いものほどえらく見えるといふことを、論じたものである。しかしその根本思想はこれをフロイドから得てゐることは、前年の論文を讀んで見るとわかる、
『フロイド派の氣焔』の前がきには、機關誌發刊の辭全文が譯してある。一記者とあるが、誰であつたか覺えてゐない。文體用語から見て、私でないことは、タシカである。「世人は今

も尙ほ精神分析を以て、或病的狀態を治療するの一新法となす以上に眞價の如何を知らざるもの多し。何ぞや、曰く、精神分析は之れ一個の確實なる心理學にして、」云々といふようなことが說かれてゐる。

一九一四年（大正三年）になつて、初めて私が表面にでゝゐる。即ち今年の論文を列擧すると、左の通りである。

題	人	月	ページ
夢と性慾と子供	上野陽一	八	一七
フロイドの夢の說（上）	同	九	二〇
フロイドの夢の說（下）	同	一〇	一七
精神分析法の起源	同	一〇	一〇

今年は偶然に私だけが精神分析について書いてゐる。別に計畫的にやつたワケではないが、結果はさういふことになつてゐる。いづれも通俗講話體の讀みものであるから、出典なども明らかになつて居らず、自分でもどんな本を參考にして書いたか忘れてしまつた。『精神分析法

の起源』といふのは、初め『帝國教育』に掲げたものであつて、主としてブロイヤー博士のヒステリーに關する研究を紹介し、最後に、その當時フロイドといふ學生がゐて、氏の研究に興味を感じ、遂に今日の精神分析法を大成したことで結んである。

私はこの年に『心理學通義』といふ六〇〇ページばかりの本を公にしたが、その中にもフロイドの夢の說を紹介した、恐らく心理學概論で、精神分析を紹介したものは、本書が最初であらう。爾來二十年、途中一度改訂して、通算六十五版になつてゐると思ふ。この本が廣く世に行はれたことは、同時に精神分析法を廣く世に紹介したことにもなるワケである。

一九一五年（大正四年）は、フロイドの夢の說を讀んで、いろ〳〵の反響を寄せられた方の多かつたことが特色である。例へば『フロイドの夢の說を讀みて自分の夢を』といふような原稿があつた。實際に見た夢に、フロイド式の解釋を加へたものである。雜誌には、某愛讀者とバカリかいてあるが、文面を見ると私の知つてゐた人に相違ない。官吏であることは間ちがひないが誰であつたかは覺えてゐない。

その外、面白いと思つて、雜誌に紹介した分だけでも二三あつた。その頃、私は夢を見なが

ら、夢の中でいろ〱の解釋を試みてゐたほど、夢の解釋に熱心であつたことを覺えてゐる。
まとまつた書きものとしては、

題	人	月	ページ
忘却と抑壓作用	大槻快尊	一	一六
精神分析學者の觀たる教育	上野陽一	七	一三
昇華作用と教育	同	八	一七

大槻君の論文はフロイドの忘却説には反對の意見をもつビーアの説を紹介しつゝ、フロイドの説と對照して論じたもので、ドチラの説が正しいかは、結論を與へてゐない。

私のは、いづれも精神分析學の立場から教育を論じたもので、前者はプフィスターの説の紹介で、こゝで初めてアドラーと、ユングの説が簡單にでゝゐる。後者はジョーンズの論文の紹介で、無意識中に行はれるエネルギーのおきかへを論じ職業指導の方針にまで論及してゐる。

一九一六年（大正五年）以後頃から精神分析論が下火になつてきた。一九一六七年には斷片的のものゝ外、一つもまとまつたものはでゝゐない。大正七年の四月號に、久保良英氏の『お

伽噺の精神分析』といふのがでゝゐる。これは單なるフロイド説の紹介ではなく、いろ〳〵日本の御伽噺の例を引いて、フロイド説を證明したような形になつてゐる。七年一月の心理學通俗講演會で講演したものである。」云々と。

降つて大正十三年三月號の『變態心理』（中村古峽氏編輯）には同氏の『日常生活の精神病理』の譯の一部分が掲載せられてゐることを私は知つてゐる。これは英譯からの重譯である。この雜誌には分析學に關する記事はその他にも多いが、一々擧げ切れない。これと前後して（多分震災以前であつたと記憶してゐるが）、松村武雄氏が『婦人公論』誌上で精神分析を數回に亘つて連續講述してゐたことを記憶してゐる。同氏は傳説學者であるから、その方面から斯學に興味を覺えるやうになつたものと思はれる。また『神經學雜誌』や『腦』にも斯學に關する記事は豐富である。

フロイドの著書の譯が始めてとにかく單行本となつて現れたのは、昭和三年三月十五日發行（啓明社）の『トーテムとタブー』（吉岡永美氏譯）である。これは英譯からであるが、始めて原書から飜出せられたのは安田德太郎氏譯の『精神分析入門』二卷（アルス）であらう。發行

は昭和三年四月七日である。併しフロイドの著書を始めて全譯して、精神分析の常識未だ普及せざる一般讀書界に送り出すには、これ等の兩書は必ずしも適當でない。殊に『トーテムとタブー』,,Totem und Tabu" (1913) はあまりに唐突であると云はねばならぬ。これは應用的論文だからである。『精神分析入門』"Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse" (1917) とても、未だ必ずしも適當とは云へない。最も適當と思はれるのは『精神分析五講』,,Über Psychoanalyse——fünf Vorlesungen" であらう。これはフロイドが一九〇九年に始めてアメリカに於いて講演した時の筆錄であつて、一番分り易いものである。安田氏のと同じ書はまた中村古峽氏に依つて譯せられて『世界大思想全集』(春秋社)中に收められてゐるが、これは英譯に依つたものであるやうである。

その後、昭和四年六月に『無意識心理派の文學』なる拙論が朝日新聞紙上に掲げられた頃には。精神分析は俄然一般的になつて來て、同年末には春陽堂とアルスの兩書肆から二種の『フロイド全集』が出版せられると云ふ勢になつて來た。その前から、長谷川誠也氏、矢部八重吉氏、對馬完治氏、並びに著者等に依つて精神分析學研究所は設立せられて今日に至り、春陽堂

のフロイド全集はこの研究所の事業と云ふことになつてゐる。

×

今やフロイドの著書は殆どその主なものは譯述せられてゐるが、內には既に三種の譯を見てゐるものさへある。卽ち『トーテムとタブー』がそれで、三人の譯者とは吉岡永美氏、關榮吉氏（アルス）、對馬完治氏（春陽堂）である。

總て書籍を繙讀するには、その書籍は當該著者の全業績中に如何なる位置と意義とを有するものであるかを知悉してかゝらねばならぬ。吾人はさきに精神分析の機能を三つの方面に分けて研究した。それ故に、只今も、フロイドの各々の著書が、それ等三つの領域の何れに屬するかを明かにしておくのが便利であらうと思ふ。さうしてそれ等の領域內に於いて更にまた如何なる特質を有するかを細說して見よう。

（一） 病氣の治療とその記述としては、まづ

一、『ヒステリー研究』（一九八五年）これは一部分はブロイヤーとの合著となつてゐるが、とにかく分析學以前のものである。これには安田德太郎譯（昭和五年十一月アルス）がある。

併しこれは同氏譯の『入門』ほど出來がよくない。果して同氏自ら筆を執つたるものなりや？

二、『夢の註釋』（『夢の解釋』又は『夢判斷』）（一九〇〇年）は夢の分析解釋に依る治療上の經驗の說述のみならず、また夢及び無意識心理に關するさま〴〵な理論（例へば、願望充足說 Wunscherfüllungstheorie, エディポス・コムプレクス說、その他）などが論じてある。これには著者の譯（昭和四年十二月、春陽堂）並びに新關良三氏の譯（アルス）がある。

三、治療報告 „Krankengeschichten“（一九〇五年以降）。これは幾多の分析治療の報告を集めたもので、飜譯としてはその內の一篇『强迫神經症の一例』„Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose“（1909）が對馬完治氏（昭和五年三月、春陽堂）に依つて譯されてゐる。

（II）理論を述べたものとしては、治療に直接役立つ具體的な理論と、間接に役立つ（或は關係のない）抽象的理論とを區別して見るのも面白いかと思ふ。具體的理論を述べたものとしては、既に云つた通り、まづ

一、『夢の解釋』がある。次に

二、『日常生活の精神病理』„Zur Psychopathologie des Alltagslebens"（1904）これは無意識が意識の檢閲を裏切つて我々の行動を支配すると云ふ理論を人々の實際の日常生活の内から幾多の實例を取出して來て證明したものである。譯としては著者のもの（昭和五年十月、春陽堂）と、丸井淸泰氏のもの（昭和五年十二月、アルス）とがある。なほ

三、『療法論』„Zur Technik" がある。これは時々に書いたものを集めたので、治療上の種々な臨床的理論の書としては貴重である。著者の譯（昭和七年、春陽堂）がある。

四、『性說に關する三論文』„Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie"（1905）これは無意識心理現象としての性慾を論じた書で、生理學からの書の云ひ及ばざるところを說き、一般の讀者にも興味深く讀まれる。矢部八重吉氏の譯（昭和六年三月、春陽堂）がある。

抽象的な論としては

五、『超心理學』„Matapsychologie" がある。これは澤山の小論文を集めたものである。林髞氏譯（アルス）がある。

六、『快不快原則を超えて』„Jenseits des Lustprinzip"（1920）に就いては前に紹介した

からこゝには贅せぬ。譯としては對馬完治氏のもの（昭和五年三月、春陽堂）と久保良英氏のもの（アルス）とがある。

七、『集團心理と自我の分析』これはル・ボンの群集心理の批評から出發して精神分析的見地（リビドー說）から社會結合の心理を說明したもので、興味のある獨創的な論究である、譯としては久保良英氏の（アルス）と長谷川誠也氏の（昭和六年六月、春陽堂）とがある。

八、『自我とエス』"Das Ich und das Es"（1923）は超心理學の重要な論文であることは前にも云つた通りである。譯としては對馬完治氏の（昭和七年一月、春陽堂）がある。

以上四著はフロイドの超心理學上の四部作と云つてよからう。なほ應用的理論の書としては

九、『トーテムとタブー』並びに

十、『機智とその無意識に對する關係と』"Der Witz und seine Beziechung zum Unbewussten"（1905）とがある。前者には『野蠻人と神經症患者との心理生活に於ける二三の一致』と小見出しがついてゐるに徵しても分る通り、應用的理論の書である。後者は經濟的見地から機智、滑稽、諧謔等を論じた書で、精神分析から美學的領域への進出の最初の試みであ

る。『トーテム』の譯者については既に云つた通りであるが、『機智』論の譯は著者の試みたもの（昭和六年十一月、春陽堂、『分析藝術論』の卷頭）と、正木不如丘氏のもの（昭和五年五月、アルス）とがある。

十一、『諧謔』Der Humor（1927）

十二、『詩人と空想』Der Dichter und das Phantasieren（1908）

前者に就いて前章（一〇二頁以下）に紹介したから、こゝには贅せぬ。後者は詩が如何に現實に滿たされざるところを空想に於いて代償的に滿たさんとして成されるかを證明したもの。共に拙譯『分析藝術論』中に收めてある。

（三）具體的應用論として、まづ藝術方面のものを擧げれば

一、『レオナルド・ダ・ヸインチの幼兒期記憶』,,Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci“（1910）がある。これは世界美術史上の謎とされてゐるレオナルド作の『モナ・リーザ』の不思議な微笑が作者の幼時に於ける母の面影の追想であることを各方面の證據を擧げて論じたもので、かう云ふ種類の論文の內ではフロイドが最も得意のものであらうと考へら

れる。譯としては安田德太郎氏のもの（『藝術と精神分析』昭和四年、ロゴス社）と、著者のもの（『分析藝術論』の内）とがある。

二、『ミケルアンヂェロのモーゼ』„Der Moses des Michaelangelo“（1014）これはモーゼの巨像の只今見る如き姿勢をとるに至つた前姿勢を想像し、そこから結果としての現狀を推論した微細な論文で、精神分析が如何に普通の人々の無視してゐる細々した點に重大な意義を發見するかを示したものである。拙譯『分析藝術論』の中に收められてゐる。

三、『匣選みの動機』“Das Motiv der Kästchenwahl”（1913）これはシェイクスピアの『ヴェニスの商人』と『リヤ王』とを比較して一人の男が三人の女の内の最後の一人を選ぶ主題の起源と眞意義とを論じたもので、非常に深刻な論文である。『分析藝術論』の中に收めてある。

四、『無氣味に就いて』“Das Unheimliche”（1919）これは無氣味が實は親熟したるものゝ無意識內に抑壓されてその反對となつて感ぜられることを各種の實證により明かにしたもので、內に去勢恐怖の文藝としてアマデウス・ホフマン A. Hoffmann の『砂男』の分析批評

がある。甚だ興味ある論である。同じく『分析藝術論』の中に收めてある。

五、『イェンゼンの「グラディーヴァ」に於ける妄想と夢』„Der Wahn und Traum in W. Jensens „Gradiva" (1907) これは『グラディーヴァ』と云ふ小説の分析批評である。作者イェンゼンはこれに就いての感想を『精神分析運動』誌に寄せてゐる。『妄想と夢』の譯は安田德太郎氏(前揭『藝術と精神分析』の內)に依つて成されてゐる。

なほその他の應用論としては

六、『一錯覺の將來』„Die Zukunft einer Illusion" (1928)

七、『文明に於ける不快なるもの』„Das Unbehagen in der Kultur" (1930)

などがある。長谷川誠也氏と著者との譯(昭和六年六月、春陽堂)がある。二書はフロイドの文明批評又は宗敎批評とも云ふべきもので、宗敎の强迫神經症的、願望充足的現象としての一面を抉剔したものとして何人も一應耳を傾くべき價値があると思ふ。

以上で大體、フイロドの主要なる著書は紹介し盡したが、まだこれだけで全部でないことは云ふまでもない。

フロイドの講義風の論文としてはさきに二種の書（一三三頁參照）を紹介しておいたが、その外に『大英百科辭典』の出版所から公刊した『多事なる時代』叢書に『精神分析要領』,,Kurzer Abriss der Psychoanalyse"（1824）がある。同書にはブリル A. A. Brill に依る英譯が載つてゐるわけである。フロイドの英譯書は、殆ど大抵のものは、ブリルに依つてなされてゐるのである。

フロイドの論文としては、右の外に、

『精神分析發達史』,,Zur Geschichte der Psychoanalytischen Bewegung"（1914）

『自傳』"Selbstdarstellung"（1925）

『非醫者の分析可否の問題』,,Die Frage der Laienanalyse"（1926）

などはそれぞれ題名の示す如き別々の意味に於いて興味もあり重要でもある。フロイドは非醫者の分析を不可とせぬと云ふ意見である。精神分析は實際、直感と天才とを多分に必要とする學問であり技術である。これ等の飜譯は私が既に試み、『五講』と『要領』と『自傳』と『發達史』とは『精神分析總論』の題下に、『非醫者の分析』は『療法論』の内に、各々收めてお

いた。

×

フロイドの著書以外では……

一、『近代文學と戀愛』奧俊貞氏譯（大正十三年七月三十日、內外出版株式會社發行）原書は "The Erotic Motive in Literature" by Albert Mordell.

一、『辨證法的唯物論と精神分析法』今井末夫氏譯（昭和七年ロゴス社發行）Dialektischer Materialismus und Psychoanalyse: W. Reich の譯。

一、『フロイド主義と辨證法的唯物論』植田正雄譯（昭和七年三月二十日、京都共生閣發行）前書と同樣ライヒの原書、及び Freudismus, Soziologie, Psychologie; I. Sapir の兩著を並譯せるもの。

一、『愛の精神分析』ヴィッテルス F. Wittels 原著、井澤三樹氏譯（昭和五年十一月、アルス）

一、『文藝學と精神分析』ムシュク W. Muschg 原著、武田忠哉氏譯（昭和六年九月金星堂發行『藝術學研究』特輯第二、『文藝學研究』中に收載されてゐる。）の二著がある。前者の原

著ヴィッテルスは元來フロイドの門下で、一時離れてゐたが今又その下に歸つてゐる。比較的に通俗的な著書に依つて斯學の普及に勉めてゐる。ヴィッテルスには他に『フロイドとその時代』と云ふ著書がある。これは英譯されてゐるが、井澤氏の譯も英譯に依つたらしく思はれる。武田氏のはムシュクの原著を忠實に譯したもので、公平中正な立場で文藝學界に於ける精神分析の意義を闡明してゐる好著である。

×

またわが國に於ける獨創の論著を、發行年月順に羅列紹介して見る。

一、『性慾研究と精神分析學』榊保保三郎著（大正八年一月十日初版、實業之日本社發行）

一、『精神分析學』前野喜代治著、（大正十四年四月五日、東京、廣文堂發行）田中寛一監修『最新心理學叢書』第一篇。

一、『精神分析法』（前後二卷）丸井清泰著（昭和三年八月八日、東京、克誠堂書店發行）

一、『精神分析學』久保良英著（東京、中文館發行）

一、『苦悶の象徴』厨川白村著。

一、『フロイド派と文藝』對馬完治著（昭和五年八月十日、東京、天人社發行）『新藝術論システム』叢書の內。

一、『文藝と心理分析』長谷川誠也著（昭和五年九月五日、春陽堂發行）

一、『精神分析槪論』大槻憲二著（昭和七年五月十日發行、東京、雄文閣）本書の前版。

一、『精神分析の理論と應用』矢部八重吉著（昭和七年八月廿八日、早稻田大學出版部發行）

一、『精神分析雜稿』大槻憲二著（昭和十年五月二十日、東京、岡倉書房發行）

×

その他連續刊行物としては、次の二者がある。

一、『精神分析論叢』東北帝國大學醫學部精神病學敎室業積として丸井清泰敎授を主幹として發行。昭和七年創刊。（年二回乃至四回刊行）

一、『精神分析』東京精神分析學研究所（本鄕區動坂町三二七）出版部發行。雜誌委員は岩倉具榮、長谷川誠也、長崎文治、大槻憲二の四名。昭和八年五月創刊、九年十一月まで月刊。六月休刊、七月以降隔月刊。現在に至る。

(II) 術語表解

以上の概說の欲を補はむために、次に精神分析の術語の主要なるものを五十音順に掲げ、これに若干の解說を附して見た。また兼ねて索引としての役目をも多少は果させておいた。語表としてはなほ他に拙譯『夢の註釋』卷末の『精神分析學語彙』並びに雜誌『精神分析』に連載せられた『語彙』がある。並せ參照せられたし。各々獨自の存在意義を有してゐる筈である。

アムビヴレンツ――アンビ(Ambi)とは二つの意。ヴレンツ(valenz)とは價値とか力とかの意。相反並存性。三二頁。

意識 Bewusstsein,――九五頁。

陰蔽記憶 Deckerinnerung――古い無意識的記憶が重なり、一緒になつて出て來て、たゞ新しい方のみ意識せられること。

エス――一一五頁。

エディポス・コムプレクス――六二頁。

エレクトラ・コムプレクス Elektrakomplex――女性の同性親に對するエディポス・コムプレクス。フロイドはこの語を認めず、總括してエディポスと云ふ。

快不快原則――不快を避け快樂を追及する無意識の

働き方を云ふ。これに反し自我は現實原則に支配せられる。人間の行動は常に快不快原則に從はむとする無意識と、現實原則に從はむとする自我との妥協となつて營まれる。人間は現實原則に堪えられなくなると、自我と云ふ大將を殺して快不快原則の軍門に降を乞ふ。これが神經症又は精神症である。

カニバリスムス——人肉食の意。口唇愛により相手を取込むこと。野蠻人が實際（肉體的）に行つたところを文明人は精神的に行ふ。

願望充足說——九頁。

去勢 Kastration——精神分析にては男根を切ること。この恐怖を去勢恐怖と云ふ。神經症に於いてはこの恐怖に關係あるもの多きことは分析により發見せらる。

檢閲——一五頁。

顯在內容——七頁。

現實試驗力 reality-testing power——現實に順應するやうに行動を支配する自我の力。

口唇性感 Oralerotik——六七頁。

肛門性感 Analerotik——七九頁。

コムプレクス——六四頁。

催眠術——三頁。

サディスムス Sadismus——虐待性、加虐性と譯す。從來の性慾學に於いては、これは性對象を虐待することに依り亢奮する一種の變態性となつてをつたが、精神分析學に於いては意味がもつと廣くなり、一切の攻擊慾、破壞慾を意味し、それが自已に向つてマゾヒスムスと合し、死の本能をさへ意味することゝなつた。

出產外傷說——出產時の幼兒の心的外傷が無意識に定着して種々のコムプレクスとなるとの說。ランクの說。一一七頁。

昇華 Sublimierung——リビドーがその本來の性的

なものから純化せられて、性目的を離れたものとなるを云ふ。一切の文化的なものは性を犠牲としてなしたるものとフロイドの云ふはその意味。

性器後期 Nachgenitale Periode――リビドーの主權が性器に確立し、性的に一人前になつて（幼兒性感時代を卒業して）以後。

性器前期 Vorgenitale Periode――口唇、肛門、尿道時代、卽ち性感が未だ性器の中央政府に於いて統裁せられず、各部分本能に於いて群雄割據せる狀態の時期。六八頁。

前意識 Vorbewusstsein――九五頁。

潜在內容――七頁。

退行――一〇頁。

代償 Ersatz――無意識がその足らざるところ（願望）を滿すに、その本來の對象と或る意味又は程度にて似たるものを以てこれに宛てること。藤壺は桐壺の代償とされてゐる如き。八三頁。

男性器羨望 Penisneid――女性に於いて去勢コムプレクスのある故に、男性に對して女性が無意識的に持つ反感嫉妬の根柢。

超心理學――九一頁。

超自我 Über-ich――理想我に同じ。幼兒に於ける兩親的感化の遺産とせられる。俗に云へば良心と同じであるが、良心と云ふやうな價値的な見方ではなく、全く科學的な概念であつて、美しき病的のものと見られる。

重複決定――原因が二つ以上あること。アムビヴレンツの如きも一種の重複決定と云へよう。過度決定と譯すも可。一二頁。四九頁。

抵抗――五頁。

轉位 Verschiebung, displacement,――「見當違ひ」と譯すと分りいゝ場合がある。「坊主憎けりや袈裟まで憎い」と云ふは、憎しみが坊主から袈裟へ「轉位」されてゐるのである。

轉嫁 Übe tragung――「交付」と譯すると分りいゝ場合がある。何かのコムプレクスに基き、リビドーを對象に交付すること。

轉嫁神經症 Übertragungsneurose,――リビドーを對象に轉嫁させ過ぎて、内に引揚げることが不可能になつてゐる病。その反對のものはナルチスス型神經症。これはリビドーを内に引揚げて對象に交付しなくなつてゐる病。

纒綿――平たく云へば、思ひをかけること。六一頁。

投出 Projektion――已れの無意識にあるものを相手にある如く考へること。「取込み」の反對。

同一化 Identifizierung――愛する相手を無意識的に自分の内に取込むこと。模倣などゝなつて症候す。

ナルチスムス――五六頁。

尿道性感 Harnerotik――幼時に於て尿道粘膜に强き亢奮を感じ、それが定着せること。この性感ある性格者は、名譽心强し。

發散(アプレアギーレン又はアプレアクチオン)――無意識に定着してゐるコムプレクス又は觀念群を分析法により意識化すると、そこに結ばれてゐる感情が發散せられる。「煙突掃除法」と云ひ、「談話療法」と云ひ、「洗流し法」と云ふも、みな同義。七一頁。一一八頁。

反動構成 Reaktionbildung,――外界の刺戟に對して無意識が示す一切の反應を云ふ。それは併し現實的には全く無意味であることを特質とする。例へば、江戶の敵を長崎で打つたり、劣等感あるものが虛威張りをしたりすること。

汎性慾說――一一二頁。

非醫者の分析――七六頁。

惚込み Verliebung――リビドーを殆ど全部對象に纒綿し、超自我をその相手に投出し、自我に於いてリビドーの貧困を來せる狀態。

マゾヒスムス Masochismus――被虐待により性的

亢奮する傾向。サディズムと共にアムビヴレントな一種の部分本能と見なさる。サディスムスの條參照。

無意識——三頁。三三頁。

幼兒性感——六六頁。

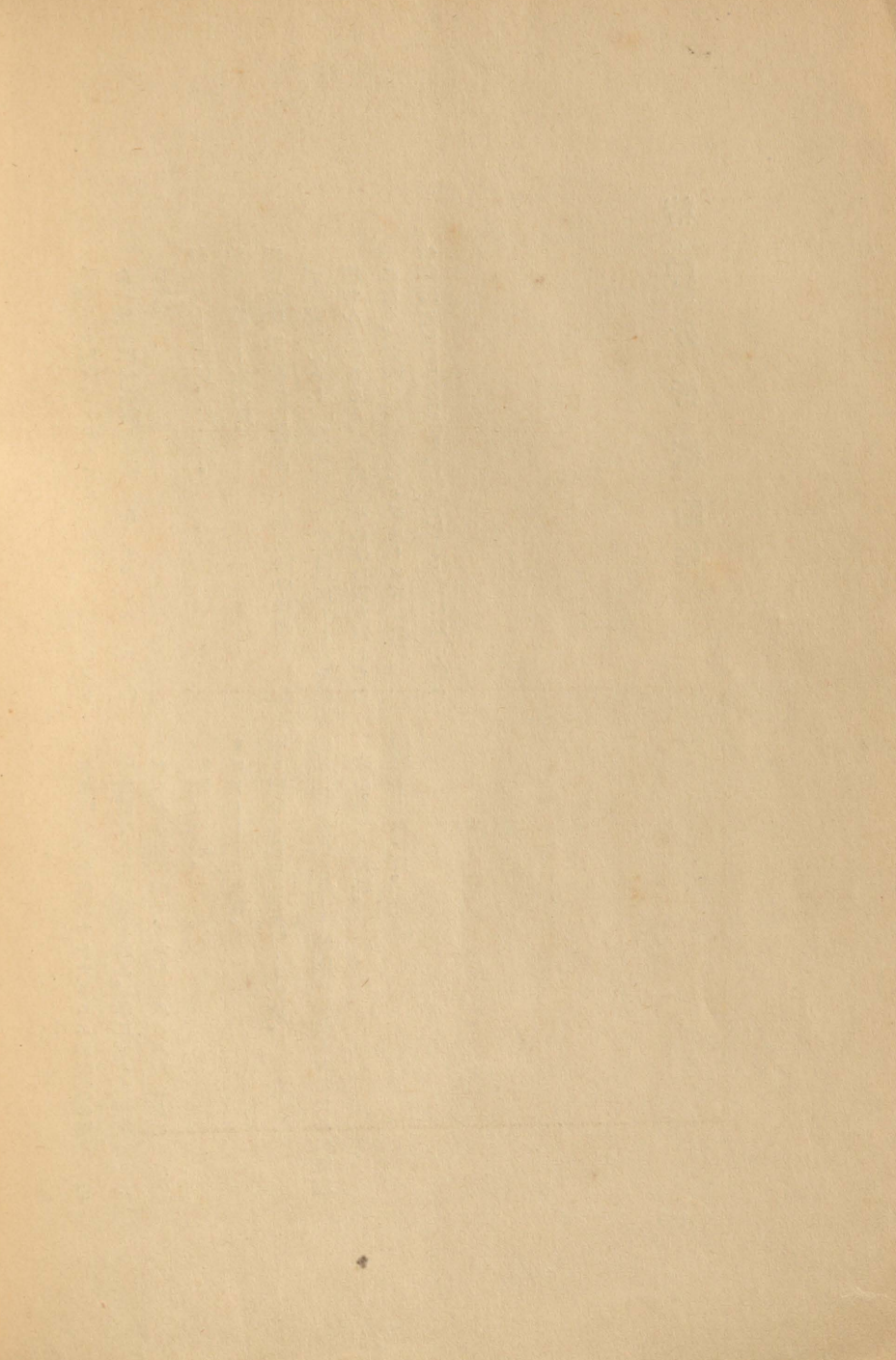
理窟づけ Rationalization——無意識の行動を意識が是認せんとし、意識持合せの材料にてこれを說明せんとすること。結局、それは口實と同じものになる。英國分析學者E・ジョーンズの造語。

劣等感 Minderwertigkeitsgefühl——俗に云ふ僻み本來持つて生れたナルチスムスが現實の壓迫に會つて傷はれた狀態を云ふ。故に、その根柢はナルチスムスであつて、ナルチスムスなきところに劣等感はない。

リビドー——五九頁。

やり損ひ Fehlleistung——六頁。

歪み Entstellung——檢閱の眼をくゞるために無意識の企てる變裝。

抑壓——六一頁。

精神分析概論 終

昭和七年五月十五日　初版印刷
同　　　十八日　同　發行
昭和八年二月十日　再版發行
昭和十年六月卅日　増訂第三版印刷
同　　七月五日　同　　發行

「精神分析概論」
定價金八十錢

著者　大槻憲二
東京市本郷區駒込動坂町三二七
東京精神分析學研究所出版部代表
發行者　大槻憲二
東京市神田區西神田一ノ四
印刷者　松村保
東京市神田區西神田一ノ四
印刷所　松村印刷所
東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所出版部
振替東京七八八一七番